

# 花き病害虫防除指針

## 目次

花き改正事項一覧表	2
1 花き共通	3
2 きく	5
3 カーネーション	14
4 ストック	18
5 アスター	20
6 りんどう	21
7 宿根かすみそう	25
8 トルコギキョウ	26
9 スターチス類	29
10 デルフィニウム	30
11 ばら	31
12 グラジオラス	34
13 ゆり	36
14 チューリップ	37
15 シクラメン	39
16 プリムラ	41
17 さくら(切り枝用)	42

防除方法に記載された農薬には、それぞれのRACコードを( )書きで示していますので、  
農薬を選択する際の参考としてください。

花き改正事項一覧表

作物名等	病害虫名等	改正事項	改正内容	
き	く	白さび病	防除方法（参考及び注意事項）及び掲載農薬一覧	メジャーフロアブルを追加
		アブラムシ類	防除方法 掲載農薬一覧	マラバッサ乳剤を削除
		アザミウマ類	防除方法（参考及び注意事項）及び掲載農薬一覧	プリンスフロアブルを削除 オンコルマイクロカプセルを削除
カーネーション		アザミウマ類	防除方法（参考及び注意事項）及び掲載農薬一覧	プリンスフロアブルを削除
ばら		アブラムシ類	防除方法（参考及び注意事項）及び掲載農薬一覧	オンコルマイクロカプセルを削除

※花き類・観葉植物等の用語について

花き病害虫防除指針において、「花き類・観葉植物としての登録」として示したものは、「花き類・観葉植物」として登録のある薬剤以外に「花き類・観葉植物(〇〇〇を除く)」、のいずれかで登録のあるものとして記載した。

1 共通

(1) 各種花きの灰色かび病防除

1) 耕種の防除

- ハウスの通風・換気を図り、多湿を避ける。密植は通風が悪く、灰色かび病が発生しやすい。
- 通路を含めてポリフィルムや敷わらマルチを行い、ハウス内湿度の低下を図る。
- 被害茎葉は、伝染源となるので早めに除去する。特に枯死した葉や葉焼で傷んだ部分は容易に感染し、多量の胞子が形成される。

2) 薬剤による防除

- 薬剤は、病原菌に対する作用機構の異なるものを輪番で使う「ローテーション散布」を厳守する。
- 灰色かび病は、数日低温・多湿な天候が続くと多発する傾向がある。したがって、このような天候が予想される場合には、予防散布を行う。
- 花(花卉)は灰色かび病菌が感染しやすく、しばしば淡褐色の小斑点を生じる。したがって開花期前には、必ず予防散布を行う。また、開花期前は汚れの少ない薬剤を選ぶ。

3) 薬剤耐性菌対策

- 本県花きではベンゾイミダゾール系剤(トップジンM、ベンレート水和剤)、ジカルボキシイミド系剤(ロブラール水和剤)及びジェトフェンカルブ・チオファネートメチル混合剤(ゲッター水和剤)耐性菌の発生が確認されている(平成13年度指導参考資料)。
- ベンゾイミダゾール系剤耐性菌は広く分布し、また発生も高率であるため灰色かび病対策としてのトップジンM水和剤の使用は当面中止する。
- ジカルボキシイミド系剤(ロブラール水和剤)耐性菌も比較的広く分布し、一部発生比率の高いハウスも見られることから使用しないか、もしくは1回程度の使用にとどめる。
- ジェトフェンカルブ・チオファネートメチル混合剤(ゲッター水和剤)耐性菌は一部に発生が確認されているため、使用回数をできるだけ削減する。
- 上記以外の薬剤も、過剰な散布を行うと薬剤耐性菌発生のおそれがあるので、計画的な薬剤使用を心がける。
- 薬剤散布だけでは防除しきれない場合が多いので、耕種の防除法を組み合わせて総合的に防除する。

(2) 各種花きの灰色かび病登録農薬一覧

〈注意事項〉

本登録剤一覧は、各品目に登録のある農薬を薬剤耐性菌対策の参考として掲載したものである。

これらの農薬を使用する場合には、使用者の責任において事前に薬害の有無等を十分確認してから使用すること。

薬剤の系統	FRACコード	農薬名	適用品目														
			きく	カーネーション	ストック	りんどう	宿根かすみそう	スターチス	ばら	ゆり	チューリップ	シクラメン	プリムラ	ゼラニウム	パンジー	ひまわり	花き類・観葉植物※
有機硫黄系	M03	エムダイファー水和剤	○	○					○								
	M03	ジマンダイセン水和剤	○	○					○								
	M03	チウラムフロアブル剤*				○											○
ベンゾイミダゾール系	1	トップジンM水和剤									○						
ベンゾイミダゾール・有機硫黄系	1, M03	ラビライト水和剤								○							
ジカルボキシイミド系	2	ロブラール水和剤						○									
抗生物質(ポリオキシン複合体)	19	ポリオキシンAL水溶剤															○
アニリノピリミジン系	9	フルピカフロアブル				○	○	○	○	○							○
有機銅系	M01	サンヨール	○					○	○			○		○			○
炭酸水素ナトリウム	NC	ハーモメイト水溶剤							○								
ジェトフェンカルブ・ベンゾイミダゾール系	1, 10	ゲッター水和剤												○		○	○
抗生物質・グアニジン系	M07, 19	ポリバリン水和剤	○		○			○	○	○							○
フルアジナム	29	フロンスイド水和剤								○							
ペンチオピラド	7	アフエットフロアブル	○			○				○	○						○
ベンジルカーバメート系	11	ファンタジスタ顆粒水和剤	○														○
微生物農薬	BM02	ボトキラー水和剤															○
フルジオキシニル	12	セイビアーフロアブル20															○
ソルビタン脂肪酸エステル	-	ムシラップ														○	

\*チウラムフロアブル剤：チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル

※ 花き類・観葉植物として登録のある農薬は、一部の花きに使用できないことがあるので、事前にラベル等で確認する。

## (3) 各種花きのトスポウイルス防除

## 1) トスポウイルスとは

- トマト黄化えそウイルス (TSWV)、インパチエンスえそ斑点ウイルス (INSV)、キク茎えそウイルス (CSNV)、アイリス黄斑ウイルス (IYSV)、メロン黄化えそウイルス (MYSV) 等、ブニヤウイルス科トスポウイルス属に分類される被膜を持った球形のウイルスである。  
各ウイルスはアザミウマ類によって媒介され、永続的に伝搬する。汁液によっても伝染するが、ウイルスが不安定なため伝搬能は弱い。種子伝染、土壌伝染及び経卵伝染はしない。
- 各ウイルスと媒介するアザミウマ類の種類
  - ・ トマト黄化えそウイルス (TSWV) = ミカンキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ、ネギアザミウマ等
  - ・ インパチエンスえそ斑点ウイルス (INSV) = ミカンキイロアザミウマ及びヒラズハナアザミウマ
  - ・ キク茎えそウイルス (CSNV) = ミカンキイロアザミウマ
  - ・ アイリス黄斑ウイルス (IYSV) = ネギアザミウマ
  - ・ メロン黄化えそウイルス (MYSV) = ミナミキイロアザミウマ

## 2) 予防対策

- 育苗施設はできるだけトスポウイルス発生地から離れた場所に設置し、トスポウイルスが発生していない苗を導入する。
- 親株維持、育苗施設のアザミウマの防除を徹底する（下記アザミウマ防除の留意点を参照）。
- 定植時にトスポウイルスの感染苗を持ち込まないように注意する。

## 3) トスポウイルスの発生が確認された場合

## 〔現在、栽培している株の取り扱い〕

- 被害株率が高い場合、全株を抜き取り、下記収穫後のハウス管理に準じたアザミウマ対策を行ってから後作を作付する。
- 被害株率が低い場合、アザミウマの防除を徹底するとともに、被害症状発生株の抜き取りと土中に埋めるなど、処分を徹底する。
- 以降もアザミウマの発生及び再侵入を阻止するため、周辺雑草も含めた徹底的な防除を実施する。  
(下記アザミウマ防除の留意点を参照)

## 〔収穫後のハウスの管理〕

- トスポウイルスの発生が確認されたハウスでは切下株や雑草等をすべて抜き取り、ハウス外に搬出して土中に埋めるなどして処分する。
- 一定期間ハウスを閉め切り、50℃以上の高温処理をして、アザミウマの密度低下を図る。この処理は、晴天の日を選んで数回繰り返す。

## 〔ハウス周辺雑草の除去〕

- ハウス周辺雑草の除去に努めるとともに、ハウス周辺のアザミウマ防除も定期的に行う。

## 4) アザミウマ防除の留意点

## 〔ハウス内への侵入防止と早期発見〕

- 定植に当たっては、アザミウマが寄生していない健全な苗を用いる。
- 施設開口部に防虫ネット（目合い、0.6mm）を設置し、成虫の侵入を抑制する。
- 生育初期から茎葉での被害を注意深く観察し早期発見に努める。特にハウスの開口部周辺の発生状況をよく観察する。
- ハウス内に青色粘着板を設置し、アザミウマの発生状況を把握する。

## 〔初期防除と計画的な薬剤防除を心がける〕

- 発生が多くなってからでは防除が難しくなるので、発生初期から防除を徹底する。
- 生息が多い生長点付近や葉の隙間への薬剤散布は丁寧に行う。
- 蕾に入り込む前に低密度にしておくことが重要であるので、生育初期から計画的な防除を実施する。

## 〔適切な防除剤を選択する〕

- アザミウマ類は薬剤抵抗性が非常に発達しやすい害虫である。茎葉散布に際しては有効な系統の異なる薬剤を複数選択し、ローテーション散布を心がける。
- 植え付け時や発生初期に浸透移行性粒剤の土壌処理を組み合わせると約2～3週間密度を抑制することができる。

2 きく

(1) 防除方法

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項								
<p><b>立枯病</b> 植付前 生育全期</p> <p>は種前 (床土の消毒)</p> <p>植付前</p>	<p>[耕種的防除法]</p> <p>1 多発地で連作を避ける。 2 発病株は早期に抜き取り処分する。</p> <p>[薬剤による防除法]</p> <p>1 床土をていねいに切り返し、塊をほぐしてから高さ30cmに積み(広さは適宜)、表面を均平にする。専用のかん注機を使用して30cm間隔に深さ15cmの穴をあけ、クロルピクリンくん蒸99.5%液剤*(F:-, I:8B)又はクロルピクリンくん蒸80.0%液剤*(F:-, I:8B)を注入して足で穴をふさぐ。さらに30cmの高さに床土を積み同様に処理する。これをくりかえして適当な高さになったらポリエチレンフィルム等で被覆する。注入後7日以上被覆した後ポリエチレンフィルム等を除いてよく切りかえし、十分にガス抜きをしてから使用する。 処理時期は地温が15℃くらいのときがよい。</p> <p>2 畑の土壤をていねいに耕起整地してから、クロルピクリンくん蒸99.5%液剤*(F:-, I:8B)又はクロルピクリンくん蒸80.0%液剤*(F:-, I:8B)を専用のかん注機を使用して30cm千鳥で深さ約15cmに注入する。直ちに地表面をポリエチレンフィルム等で被覆し、ガスもれしないようにフィルムの端は土中に埋め込む。処理後10日以上経過(地温と被覆期間参照)してからポリエチレンフィルム等を除去し、再び耕起してガス抜きを行う。</p>	<p>○ クロルピクリンくん蒸剤及びこれらの混合剤を使用するときは、必ず土壤くん蒸専用の防護マスクを着用するなど、「Ⅲ 使用上特に注意すべき農薬」p24の使用上の注意事項を遵守する。</p> <p>○ 排水や日当たりの良い乾燥した場所で行う。</p> <p>○ 消毒時の床土は手でにぎり、放した場合に自然にひび割れする程度の湿度が適当である。</p> <p>○ ビニールは変性しやすいので使用しない。</p> <p>○ 地温が10℃以下の低温期では効果が劣る。</p> <p>○ 除覆後、耕起してガス抜きをし、農薬の残臭のないことを確認してから播種又は定植をする。ガス抜きが不十分だと発芽障害、生育初期の生育不良を起こすので、粘土質土壤や連続降雨、あるいは注入量が多い場合は放置期間を長くするか耕起反転を十分に行って完全にガス抜きをする。特に低温処理の場合はガスが抜けにくいので注意が必要である。</p> <p>○ 施肥や酸度矯正のための石灰施用はガス抜き後に行う。薬剤注入前に施用すると、化学反応を起こして発芽障害や生育障害を起こす有害物が土壤中に形成されるので注意する。</p> <p>○ 消毒済みの床土には土壤病原菌や有害線虫が混入すると、激しい被害を招くことがあるので床土管理に注意し、無病種子や無病苗を植付けるようにする。</p> <p>○ クロルピクリンは住宅や畜舎などの近くでは使用しない。</p> <p>○ 注入の時は風向きを考慮し、ガスを吸入しないように注意する。</p> <p>○ 資材の消毒 育苗用資材等は、床土と一緒に消毒する。</p> <table border="1" data-bbox="901 1131 1204 1243"> <thead> <tr> <th>処理時の地温(℃)</th> <th>被覆期間(日)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>高温</td> <td>25～35 7～10</td> </tr> <tr> <td>中温</td> <td>15～25 10～15</td> </tr> <tr> <td>低温</td> <td>7～15 20～30</td> </tr> </tbody> </table> <p>* [クロルピクリンくん蒸99.5%液剤] クローピクリン</p> <p>* [クロルピクリンくん蒸80.0%液剤] ドジョウピクリン、ドロクロール、クロピク80</p>	処理時の地温(℃)	被覆期間(日)	高温	25～35 7～10	中温	15～25 10～15	低温	7～15 20～30
処理時の地温(℃)	被覆期間(日)									
高温	25～35 7～10									
中温	15～25 10～15									
低温	7～15 20～30									
<p><b>半身萎凋病</b> 植付前 生育全期</p> <p>播種又は 植付前</p>	<p>[耕種的防除法]</p> <p>1 連作を避ける。 2 発病床からさし穂や冬至芽をとらない。 3 発病株は発見しだい抜き取り処分する。</p> <p>[薬剤による防除法]</p> <p>1 次の薬剤では場を土壤消毒する。 (1)クローピクリン(F:-, I:8B) 立枯病の項を参照 (2)クロピクテープ(F:-, I:8B) 耕起整地後、90cm幅でうねを立て、うね中央に約15cmの深さの溝を掘り、本剤を溝に敷いて直ちに覆土する。覆土後ポリエチレンフィルム等で被覆し、処理10日以上経過してからポリエチレンフィルム等を除去し、再び耕起してガス抜きを行う。 (3)ディ・トラベックス油剤(F:-, I:8A, 8F) クローピクリンに準じる。</p>	<p>○ クロルピクリンくん蒸剤は、住宅や畜舎などの近くでは使用しない。</p> <p>○ ディ・トラベックス油剤は、住宅付近では使用しない。</p>								
<p><b>黒斑病</b> 定植時 生育全期</p>	<p>[耕種的防除法]</p> <p>1 密植を避ける。 2 発病葉は早期に摘み取り、処分する。</p> <p>[薬剤による防除法]</p> <p>1 次の薬剤のいずれかを7日おきに散布する。 ステンレス (F:M03) ダコニール1000 (F:M05) ストロビーフロアブル (F:11)</p>	<p>○ ダコニール1000は、花卉に薬液が付着すると漂白退色などによる斑点を生ずる場合があるので、着色期以降の散布は避ける。</p> <p>○ 開花期には、花の汚れの少ないステンレスを使用する。但し、高温時(30℃以上)の散布は薬害のおそれがあるので避ける。</p>								

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項
褐斑病 生育全期	[耕種的防除法] 1 黒斑病に準ずる。 [薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを7日おきに散布する。 トップジンM水和剤 (F:1) ダコニール1000 (F:M05) ストロビーフロアブル (F:11)	○ トップジンM水和剤1,500倍を使用すると、菌核病の防除は必要ない。
菌核病 発生初期	[耕種的防除法] 1 発病株は抜き取り処分する。	
白さび病 植付前 生育全期	[耕種的防除法] 1 無病苗を植え付けする。 2 罹病葉は早目に摘み取り処分する。 3 特にハウス栽培では過湿にならないように注意する。 [薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを7日おきに散布する。 ジマンダイセンフロアブル (F:M03, I:UN) ステンレス (F:M03) ストロビーフロアブル (F:11) アミスター20フロアブル (F:11) ファンタジスタ顆粒水和剤 (F:11) メジャーフロアブル (F:11) マネージ乳剤 (F:3) チルト乳剤25 (F:3) アンビルフロアブル (F:3) トリフミン水和剤 (F:3) トリフミン乳剤 (F:3) サブロール乳剤 (F:3) ラリー乳剤 (F:3) バシタック水和剤75 (F:7) アフエットフロアブル (F:7) ベジセイバー (F:7, M05) パレード20フロアブル (F:7) ピリカット乳剤 (F:39) ハチハチ乳剤 (F:39, I:21A) サンヨール (F:M01) コロナフロアブル (F:M02, I:UN) 2 次の薬剤のいずれかでくん煙する。 トリフミンジェット (F:3) 硫黄粒剤 (F:M02, I:UN)	○ 発病前の予防散布でないと効果が少ない。 ○ 薬剤耐性菌を回避するため、同一系統の薬剤は連用しない。 ○ サブロール乳剤では薬害が生ずることがあるので注意する。 ○ 開花期には、花の汚れの少ないステンレスを使用する。但し、高温時(30℃以上)の散布は薬害のおそれがあるので避ける。 ○ ハチハチ乳剤は、アブラムシ類、アザミウマ類及びハモグリバエ類の防除にも使用できる。 ○ 硫黄粒剤は、密閉可能な施設で、専用のくん煙器を機器の取扱説明書に従って使用する。夕方から朝までの間にくん煙し、翌朝十分に換気した後入室する。
黒さび病 発病初期	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 ステンレス (F:M03) マネージ乳剤 (F:3)	○ 開花期には、花の汚れの少ないステンレスを使用する。但し、高温時(30℃以上)の散布は薬害のおそれがあるので避ける。
べと病 生育全期 発病初期	[耕種的防除法] 1 過湿にならないようにする。 2 密植を避ける。 [薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 エムダイファー水和剤 (F:M03) ジマンダイセン水和剤 (F:M03, I:UN)	○ 発生に品種間差があるので、観察する際は注意する。
花腐病 生育全期	[耕種的防除法] 1 発病部は見つけしだい取り除き処分する。	
うどんこ病 植付前 生育全期	[耕種的防除法] 1 窒素質肥料を控える。 2 施設栽培では、特に風通しを良くする。 [薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 ポリオキシシンAL乳剤 (F:19) ※モレスタン水和剤 (F:M10, I:UN)	※印は、花き類・観葉植物としての登録。

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項
ウイルス病 植付前 生育全期	[耕種的防除法] 1 無病苗を植え付けする。 2 発病株は見つけしだい抜き取り処分する。 [薬剤による防除法] 1 アブラムシ類を防除する。	○ 病原ウイルスとしてキクBウイルス、キュウリモザイクウイルス(CMV)及びトマトアスパーマイウイルス(TAV)が知られている。
えそ病 生育全期	[耕種的防除法] 1 発病株は見つけ次第抜き取る。 2 施設開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入を抑制する。 [薬剤による防除法] 1 アザミウマ類を防除する。	○ 病原はトマト黄化えそウイルス(TSWV)である。 ○ 花き共通「トスポウイルス」の項参照。 ○ アザミウマ類が媒介し、病原ウイルスの寄主範囲は、野菜、花き、雑草など、かなり広い。
茎えそ病 生育全期	[耕種的防除法] 1 発病株は見つけ次第抜き取る。 2 施設開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入を抑制する。 [薬剤による防除法] 1 アザミウマ類を防除する。	○ 病原はキク茎えそウイルス(CSNV)である。 ○ 花き共通「トスポウイルス」の項参照。 ○ アザミウマ類が媒介する。
土壌線虫類 植付前 播種又は 植付前21日前	[耕種的防除法] 1 連作を避ける。 [薬剤による防除法] 1 畑の土壌をていねいに耕起整地してから、クロルピクリンくん蒸99.5%液剤*(I:8B)又はクロルピクリンくん蒸80.0%液剤*(I:8B)を専用のかん注機を使用して30cm千鳥で深さ約15cmに注入し、直ちに足で穴をふさぎ、地表面をポリエチレンフィルム等で被覆し、ガスもれしないようにフィルムの端は土中に埋め込む。処理後10日以上経過(地温と被覆期間参照)してからポリエチレンフィルム等を除去し、再び耕起してガス抜きを行う。 2 ディ・トラベックス油剤(F:-, I:8F, 8A)をクロルピクリンくん蒸剤に準じ、土壌注入する。 3 ダゾメット粉粒剤*(I:8F)を、土壌を耕起整地した後、全面に均一に散布して深さ25cmくらいまで土壌混和し、ビニール等で被覆する。被覆しない場合には鎮圧散水してガスの蒸散を防ぐ。処理3週間後に少なくとも2回以上耕起して十分にガス抜きを行ったのちは種又は植付けする。	○ 施肥や酸度矯正のための石灰施用はガス抜き後に行う。薬剤注入前に施用すると、化学反応を起こして発芽障害や生育障害を起こす有害物が土壌中に形成されるので注意する。 ○ 消毒済みの床土には土壌病原菌や有害線虫が混入すると、激しい被害を招くことがあるので床土管理に注意し、無病種子や無病苗を植付けるようにする。 ○ クロルピクリンは住宅や畜舎などの近くでは使用しない。 ○ 注入の時は風向きを考慮し、ガスを吸入しないように注意する。 ○ 資材の消毒 支柱・育苗用資材等は、床土と一緒に消毒する。 ○ ディ・トラベックス油剤及びダゾメット粉粒剤の線虫類には、ハガレセンチュウを含まない。  * [クロルピクリンくん蒸99.5%液剤] クロールピクリン * [クロルピクリンくん蒸80.0%液剤] ドジョウピクリン、ドロクロール、クロピク80 * [ダゾメット粉粒剤] バスアミド微粒剤、ガスタード微粒剤
ネグサレ センチュウ 定植前	[耕種的防除法] 1 連作を避ける。 [薬剤による防除法] 1 ネマトリンエース粒剤(I:1B)を耕起・整地後に所定の薬量を土壌表面に均一に散布してロータリーで丁寧に土壌に混和する。 ネマトリンエース粒剤は、土壌中の線虫に対する効果もあるが、有効成分が根に吸収され侵入してきた線虫に効果を発揮するため、出来る限り定植直前に処理するようにする。 2 ネマキック粒剤(I:1B)を全面に均一に散布し、よく混和する。	
ネコブ センチュウ 定植前	[耕種的防除法] 1 連作を避ける。 [薬剤による防除法] 1 ネマキック粒剤(I:1B)を全面に均一に散布し、よく混和する。	

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項
<b>ハダニ類</b> 発生初期	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 アーデント水和剤 (I:3A) テルスター水和剤 (I:3A) テルスターフロアブル (I:3A) スミロディー乳剤 (I:3A、1B) コテツフロアブル (I:13) ダニカット乳剤20 (I:19) ピラニカEW (I:21A) ※ダニトロンフロアブル (I:21A) サンマイトフロアブル (I:21A) ※バロックフロアブル (I:10B) ※ダニサラバフロアブル (I:25A) スターマイトフロアブル (I:25A) カネマイトフロアブル (I:20B) #マイトコーネフロアブル (I:20D) コロマイト水和剤 (I:6) ※サンクリスタル乳剤 (I:-)	※印は、花き類・観葉植物としての登録。 ○ 開花近くから開花中にかけては散布を避ける。 ○ 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同系統薬剤及び同一殺ダニ剤の連用は避ける。 ○ ダニトロンフロアブル、サンマイトフロアブル及びピラニカEWは交差抵抗性が発現するので、同一薬剤とみなす。 # マイトコーネフロアブルはナミハダニとしての登録。
<b>アブラムシ類</b> 定植時  発生初期	[薬剤による防除法] 1 ガゼット粒剤 (I:1A) を株元に散布するか、植穴に土壌混和する。又はジノテフラン粒剤* (I:4A) を土壌混和する。 2 次の薬剤のいずれかを散布する。 ※オルトラン水和剤 (I:1B) ジェイエース水溶剤 (I:1B) トクチオン乳剤 (I:1B) サイアノックス乳剤 (I:1B) エルサン乳剤 (I:1B) ※マラソン乳剤 (I:1B) オリオン水和剤40 (I:1A) アグロスリン乳剤 (I:3A) サイハロン乳剤 (I:3A) ※スカウトフロアブル (I:3A) マブリック水和剤20 (I:3A) トレボン乳剤 (I:3A) アーデント水和剤 (I:3A) トランスフォームフロアブル (I:4C) アドマイヤーフロアブル (I:4A) ※モスピラン顆粒水溶剤 (I:4A) ベストガード水溶剤 (I:4A) ※ダントツ水溶剤 (I:4A) ジノテフラン水溶剤* (I:4A) ※チェス顆粒水和剤 (I:9B) ※コルト顆粒水和剤 (I:9B) ウララ50D F (I:29) ハチハチ乳剤 (I:21A、F:39) ピラニカEW (I:21A) 3 次の薬剤のいずれかを株元に所定量散布する。 オルトラン粒剤 (I:1B) モスピラン粒剤 (I:4A) ベストガード粒剤 (I:4A) ダントツ粒剤 (I:4A)	○ ガゼット粒剤は、品種(神馬等)によっては薬害が出る場合があるので注意する。 * [ジノテフラン粒剤] アルバリン粒剤、スタークル粒剤 ○ 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同系統薬剤の連用は避ける。 ○ エルサン乳剤は、キクヒメヒゲナガアブラムシとしての登録。 ※印は、花き類・観葉植物としての登録。 ○ サイアノックス乳剤 (1B) を10日おきに約2回、植物体上部を重点的に散布するとキクスイカミキリの防除は必要がない。 ○ エルサン乳剤 (1B) を散布した場合、カスミカメ類の防除剤は必要ない。 ○ アドマイヤーフロアブルは施設栽培での使用に限る。 * [ジノテフラン水溶剤] アルバリン顆粒水溶剤、スタークル顆粒水溶剤 ○ ハチハチ乳剤は、白さび病防除にも使用できる。
<b>キクスイカミキリ</b> 5～6月頃	[耕種的防除法] 1 被害を受けた新芽は、しおれからやや下で切り取って除去する。 2 ほ場周辺のキク科雑草を除去する。	
<b>カメムシ類</b> 発生初期	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 スミチオン乳剤 (I:1B) ※アディオオン乳剤 (I:3A) ジノテフラン水溶剤* (I:4A)	※印は、花き類・観葉植物としての登録。 * [ジノテフラン水溶剤] アルバリン顆粒水溶剤、スタークル顆粒水溶剤
<b>ハガレセンチュウ</b> 6月頃	[耕種的防除法] 1 敷きわらを行う。	
<b>オンシツコナジラミ</b> 発生期	[薬剤による防除法] 1 カルホス乳剤 (I:1B) を散布する。	○ カルホス乳剤は、オンシツコナジラミ若齢幼虫としての登録である。

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項
<b>ハモグリバエ類</b> 定植時 発生初期	[薬剤による防除法] 1 モスピラン粒剤 (I:4A) を植穴混和する。 2 次の薬剤のいずれかを散布する。 #カルホス乳剤 (I:1B) #オルトラン水和剤 (I:1B) #ジェイエース水溶剤 (I:1B) ダントツ水溶剤 (I:4A) ハチハチ乳剤 (I:21A, F:39) #カスケード乳剤 (I:15) ※#トリガード液剤 (I:17) スピノエース顆粒水和剤 (I:5) 3 #ベストガード粒剤 (I:4A) か、#ダントツ粒剤 (I:4A) を散布する。 4 ジノテフラン水溶剤*(I:4A) を株元にかん注する。	○ 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同系統 (同じRACコード) 薬剤の連用は避ける。 ○ 発生種によっては薬剤の感受性及び防除効果が異なるので注意する (「平成21年度普及する技術・指導参考資料 (p. 47-50)」参照)。 #印は、マメハモグリバエとしての登録。 ※印は、花き類・観葉植物としての登録。 ○ ハチハチ乳剤は、白さび病防除にも使用できる。 * [ジノテフラン水溶剤] アルバリン顆粒水溶剤、スタークル顆粒水溶剤
<b>アザミウマ類</b> 生育初期 発生初期	[耕種的防除法] 1 アザミウマが寄生していない健全な苗を用いる。 2 施設開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入を抑制する。 3 ハウス開口部周辺の発生状況をよく観察し、早期発見に努める。 4 ハウス内に青色粘着版を設置し、発生状況を把握する。 [薬剤による防除法] 1 モスピラン粒剤 (I:4A) を株元に所定量散布する。 2 次の薬剤のいずれかを散布する。 ※オルトラン水和剤 (I:1B) ジェイエース水溶剤 (I:1B) トクチオン乳剤 (I:1B) トクチオン細粒剤F (I:1B) トランスフォームフロアブル (I:4C) ダントツ水溶剤 (I:4A) ハチハチ乳剤 (I:21A, F:39) ※ハチハチフロアブル (I:21A, F:39) カウンター乳剤 (I:15) フェルコンエースフロアブル (I:5、18) スピノエース顆粒水和剤 (I:5) ※ディアナSC (I:5) アファーム乳剤 (I:6) ファインセーブフロアブル (I:34) マッチ乳剤 (I:15) 3 次の薬剤のいずれかを株元に所定量散布する。 オルトラン粒剤 (I:1B) ジェイエース粒剤 (I:1B) ダントツ粒剤 (I:4A)	※印は、花き類・観葉植物としての登録。 ○ ハチハチ乳剤は、白さび病防除にも使用できる。
<b>ミカンキイロアザミウマ</b> 定植時 発生初期	[薬剤による防除法] 1 モスピラン粒剤 (I:4A) を植え溝の土壌に混和する。 2 次の薬剤のいずれかを散布する。 アーデント水和剤 (I:3A) コテツフロアブル (I:13) ベストガード水溶剤 (I:4A) アクタラ顆粒水溶剤 (I:4A) カスケード乳剤 (I:15) 3 次の薬剤のいずれかを株元に所定量散布する。 ベストガード粒剤 (I:4A) オンコル粒剤5 (I:1A) 4 アクタラ顆粒水溶剤 (I:4A) をかん水チューブを用いてかん注する。	○ 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一系統 (同じRACコードの) 薬剤の連用は避ける。 ○ 左の薬剤のほか、アザミウマ類に記載された耕種的防除法、薬剤も参照する。

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項
オオタバコガ 発生初期	<p>[薬剤による防除法]</p> <p>1 次の薬剤のいずれかを散布する。          ロムダンフロアブル (I:18)          ファルコンエースフロアブル (I:5, 18)          スピノエース顆粒水和剤 (I:5)          ※ディアナS C (I:5)          ※アフアーム乳剤 (I:6)          フェニックス顆粒水和剤 (I:28)          トルネードエースDF (I:22A)          アクセルフロアブル (I:22B)          デルフィン顆粒水和剤 (I:11A)          ※エコマスターBT (I:11A)          プロフレアS C (I:30)</p>	※印は、花き類・観葉植物としての登録。
ハスモンヨトウ 発生始期	<p>[薬剤による防除法]</p> <p>1 トルネードエースDF (I:22A) を散布する。</p>	

(2)掲載農薬一覧(きく)

農薬名	F R A C コード	I R A C コード	有効成分	適用病害虫名											
				黒斑病	褐斑病	白さび病	黒さび病	べと病	うどんこ病	菌核病	立枯病	半身萎凋病	センチュウ類	ネグサレセンチュウ	ネコブセンチュウ
クロルピクリンくん蒸剤*		8B	クロルピクリン (99.5%液剤)								○	※	※		
クロルピクリンくん蒸剤*		8B	クロルピクリン (80.0%液剤)								○		※		
クロピクテープ		8B	クロルピクリン								○				
ディ・トラベックス油剤		8A	D-D									○	○		
		8F	メチルイソチオシアネート												
ダゾメット粉粒剤*	一	8F	ダゾメット										○		
ネマトリンエース粒剤		1B	ホスチアゼート											○	
ネマキック粒剤		1B	イミシアホス											○	○
エムダイファー水和剤	M03		マンネブ					○							
ジマンダイセン水和剤	M03	UN	マンゼブ					○							
ジマンダイセンフロアブル	M03	UN	マンゼブ			○									
ステンレス	M03		アンバム	○		○	○								
トップジンM水和剤	1		チオファネートメチル		○										
ダコニール1000	M05		T P N	○	○										
ストロビーフロアブル	11		クレソキシムメチル	○	○	○									
アミスター20フロアブル	11		アゾキシストロビン			○									
ファンタジスタ顆粒水和剤	11		ピリベンカルブ			○									
メジャーフロアブル	11		ピコキシストロビン			○									
マネージ乳剤	3		イミベンコナゾール			○	○								
チルト乳剤25	3		プロピコナゾール			○									
アンビルフロアブル	3		ヘキサコナゾール			○									
トリフミン水和剤	3		トリフルミゾール			○									
トリフミン乳剤	3		トリフルミゾール			○									
トリフミンジェット	3		トリフルミゾール			○									
サブロール乳剤	3		トリホリン			○									
ラリー乳剤	3		マイクロブタニル			○									
バシタック水和剤75	7		メプロニル			○									
アフエットフロアブル	7		ペンチオピラド			○									
ベジセイバー	7		ペンチオピラド			○									
	M05		T P N			○									
パレード20フロアブル	7		ピラジフルミド			○									
ピリカット乳剤	39		ジフルメトリム			○									
ハチハチ乳剤	39	21A	トルフェンピラド			○									
サンヨール	M01		D B E D C			○									
コロナフロアブル	M02	UN	硫黄			○									
硫黄粒剤	M02	UN	硫黄			○									
ポリオキシシAL乳剤	19		ポリオキシシン複合体						※						
モレスタン水和剤	M10	UN	キノキサリン系						※						

\*クロルピクリンくん蒸剤99.5%液剤：クロールピクリン  
 クロルピクリンくん蒸剤80.0%液剤：ドロクロール、ドジョウピクリン、クロピク80  
 ダゾメット粉粒剤：バスアミド微粒剤、ガスタード微粒剤  
 ※印は、花き類・観葉植物としての登録。

農薬名	I R A C コ ド	有効成分	適用病害虫名									
			ア ブ ラ ム シ 類	ア ザ ミ ウ マ 類	ミ カ ン キ イ ロ ア ザ ミ ウ マ	ハ ダ ニ 類	オ ン シ ツ コ ナ ジ ラ ミ	カ メ ム シ 類	ハ モ グ リ バ エ 類	マ メ ハ モ グ リ バ エ	オ オ タ バ コ ガ	ハ ス モ ン ヨ ト ウ
スミチオン乳剤	1B	ME P						○				
カルホス乳剤	1B	イソキサチオン					○若			○		
オルトラン水和剤	1B	アセフェート		※						○		
オルトラン粒剤	1B	アセフェート	○	○								
ジェイエース水溶剤	1B	アセフェート	○	○						○		
ジェイエース粒剤	1B	アセフェート		○								
トクチオン乳剤	1B	プロチオホス	○	○								
トクチオン細粒剤F	1B	プロチオホス		○								
サイアノックス乳剤	1B	CYAP	○									
エルサン乳剤	1B	PAP	○ キク									
マラソン乳剤	1B	マラソン	※									
オンコル粒剤5	1A	ベンフラカルブ			○							
ガゼット粒剤	1A	カルボスルファン	○									
オリオン水和剤40	1A	アラニカルブ	○									
アディオン乳剤	3A	ペルメトリン						※				
アグロスリン乳剤	3A	シベルメトリン	○									
サイハロン乳剤	3A	シハロトリン	○									
スカウトフロアブル	3A	トラロメトリン	※									
マブリック水和剤20	3A	フルバリネート	○									
トレボン乳剤	3A	エトフェンプロックス	○									
アーデント水和剤	3A	アクリナトリン	○		○	○						
テルスター水和剤	3A	ビフェントリン				○						
テルスターフロアブル	3A	ビフェントリン				○						
スミロディー乳剤	3A	フェンプロパトリン				○						
	1B	ME P										
コテツフロアブル	13	クロルフェナビル			○	○						
トランスフォームフロアブル	4C	スルホキサフロル	○	○								
アドマイヤーフロアブル (施設栽培に限る)	4A	イミダクロプリド	○									
モスピラン顆粒水溶剤	4A	アセタミプリド	※									
モスピラン粒剤	4A	アセタミプリド	○	○	○				○			
ベストガード水溶剤	4A	ニテンピラム	○		○							
ベストガード粒剤	4A	ニテンピラム	○		○					○		
アクタラ顆粒水溶剤	4A	チアメトキサム			○							
ダントツ水溶剤	4A	クロチアニジン	※	○					○			
ダントツ粒剤	4A	クロチアニジン	○	○						○		
ジノテフラン水溶剤*	4A	ジノテフラン	○					○	○			
ジノテフラン粒剤*	4A	ジノテフラン	○									
チェス顆粒水和剤	9B	ピメトロジン	※									
コルト顆粒水和剤	9B	ピリフルキナゾン	※									
ウララ50DF	29	フロニカミド	○									
ハチハチ乳剤	21A	トルフェンピラド	○	○					○			
ハチハチフロアブル	21A	トルフェンピラド		※								
カウンター乳剤	15	ノバルロン		○								
カスケード乳剤	15	フルフェノクスロン			○					○		
マッチ乳剤	15	ルフェスロン			○							

農薬名	I R A C コ ド	有効成分	適用病害虫名										
			ア ブ ラ ム シ 類	ア ザ ミ ウ マ 類	ミ カ ン キ イ ロ ア ザ ミ ウ マ	ハ ダ ニ 類	オ ン シ ツ コ ナ ジ ラ ミ	カ メ ム シ 類	ハ モ グ リ バ エ 類	マ メ ハ モ グ リ バ エ	オ オ タ バ コ ガ	ハ ス モ ン ヨ ト ウ	
トリガード液剤	17	シロマジン									※		
ロムダンフロアブル	18	テブフェノジド										○	
ファルコンエースフロアブル	5	スピノサド		○								○	
	18	メトキシフェノジド											
スピノエース顆粒水和剤	5	スピノサド		○						○		○	
ディアナSC	5	スピネトラム		※								※	
アフーム乳剤	6	エマメクチン安息香酸塩		○								※	
フェニックス顆粒水和剤	28	フルベンジアミド										○	
アクセルフロアブル	22B	メタフルミゾン										○	
デルフィン顆粒水和剤	11A	B T (生菌)										○	
エコマスターBT	11A	B T (生菌)										※	
ダニカット乳剤20	19	アミトラズ				○							
ピラニカEW	21A	テブフェンピラド	○			○							
ダニトロンフロアブル	21A	フェンピロキシメート				※							
サンマイトフロアブル	21A	ピリダベン				○							
バロックフロアブル	10B	エトキサゾール				※							
ダニサラバフロアブル	25A	シフルメトフェン				※							
スターマイトフロアブル	25A	シエノピラフェン				○							
カネマイトフロアブル	20B	アセキノシル				○							
マイトコーネフロアブル	20D	ビフェナゼート				○ ナミ							
コロマイト水和剤	6	ミルベメクチン				○							
ファインセーブフロアブル	34	フロメトキン		○									
サンクリスタル乳剤	—	脂肪酸グリセリド				※							
トルネードエースDF	22A	インドキサカルブ										○	○
プロフレアSC	30	プロフラニリド										○	

\* ジノテフラン水溶剤：スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤

ジノテフラン粒剤：スタークル粒剤、アルバリン粒剤

注)キク：キクヒメヒゲナガアブラムシ、 若：若齢幼虫、 ナミ：ナミハダニ

灌：水溶液の株元灌注処理、 灌水：灌水チューブによる灌注処理

※印は、花き類・観葉植物としての登録。

3 カーネーション

(1) 防除方法

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項								
<p><b>立枯病</b> 植付前 生育全期</p> <p>は種前</p> <p>植付前</p> <p>定植時及び活着後</p>	<p>[耕種的防除法]</p> <p>1 連作を避ける。 2 発病株はすみやかに除去する。</p> <p>[薬剤による防除法]</p> <p>1 床土をていねいに切り返し、塊をほぐしてから高さ30cmに積み(広さは適宜)、表面を均平にする。専用のかん注機を使用して30cm間隔に深さ15cmの穴をあけ、クロルピクリンくん蒸99.5%液剤*(F:-, I:8B)又はクロルピクリンくん蒸80.0%液剤*(F:-, I:8B)を注入して足で穴をふさぐ。さらに30cmの高さに床土を積み同様に処理する。これをくりかえして適当な高さになったらポリエチレンフィルム等で被覆する。注入後7日以上被覆した後ポリエチレンフィルム等を除いてよく切りかえし、十分にガス抜きをしてから使用する。処理時期は地温が15℃くらいのときがよい。</p> <p>2 畑の土壌をていねいに耕起整地してから、クロルピクリンくん蒸99.5%液剤*(F:-, I:8B)又はクロルピクリンくん蒸80.0%液剤*(F:-, I:8B)を専用のかん注機を使用して30cm千鳥で深さ約15cmに注入する。直ちに地表面をポリエチレンフィルム等で被覆し、ガスもれしないようにフィルムの端は土中に埋め込む。処理後10日以上経過(地温と被覆期間参照)してからポリエチレンフィルム等を除去し、再び耕起してガス抜きを行う。</p> <p>3 タチガレン液剤 (F:32) をかん注する。</p>	<p>○ 土壌及び空気伝染する。 ○ 摘芯部や葉柄基部など、傷つきやすい部位から発生しやすい。 ○ クロルピクリンくん蒸剤及びこれらの混合剤を使用するときは、必ず土壌くん蒸用専用の防護マスクを着用するなど、「Ⅲ使用上特に注意すべき農薬」p24の使用上の注意事項を遵守する。 ○ 排水や日当たりの良い乾燥した場所で行う。 ○ 消毒時の床土は手でにぎり、放した場合に自然にひび割れる程度の湿度が適当である。 ○ ビニールは変性しやすいので使用しない。 ○ 地温が10℃以下の低温期では効果が劣る。 ○ 除覆後、耕起してガス抜きをし、農薬の残臭のないことを確認してから播種又は定植をする。ガス抜きが不十分であると発芽障害、生育初期の生育不良を起こすので、粘土質土壌や連続降雨、あるいは注入量が多い場合は放置期間を長くするか耕起反転を十分に行ってガス抜きを完全に。特に低温処理の場合はガスが抜けにくいので注意が必要である。 ○ 消毒済みの床土には土壌病原菌や有害線虫が混入すると、激しい被害を招くことがあるので床土管理に注意し、無病種子や無病苗を植付けるようにする。 ○ 住宅や畜舎などの近くでは使用しない。 ○ 施肥や酸度矯正のための石灰施用はガス抜き後に行う。薬剤注入前に施用すると、化学反応を起こして発芽障害や生育障害を起こす有害物が土壌中に形成されるので注意する。 ○ 注入の時は風向きを考慮し、ガスを吸入しないように注意する。 ○ 資材の消毒 支柱・育苗用資材等は、床土と一緒に消毒する。</p> <table border="1" data-bbox="916 1200 1222 1312"> <thead> <tr> <th>処理時の地温(℃)</th> <th>被覆期間(日)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>高温</td> <td>25～35 7～10</td> </tr> <tr> <td>中温</td> <td>15～25 10～15</td> </tr> <tr> <td>低温</td> <td>7～15 20～30</td> </tr> </tbody> </table> <p>* [クロルピクリンくん蒸99.5%液剤] クロールピクリン * [クロルピクリンくん蒸80.0%液剤] ドジョウピクリン、ドロクロール、クロピク80</p>	処理時の地温(℃)	被覆期間(日)	高温	25～35 7～10	中温	15～25 10～15	低温	7～15 20～30
処理時の地温(℃)	被覆期間(日)									
高温	25～35 7～10									
中温	15～25 10～15									
低温	7～15 20～30									
<p><b>萎凋病</b> 生育全期</p> <p>育苗前</p> <p>は種又は植付前</p>	<p>[耕種的防除法]</p> <p>1 発病株はすみやかに抜き取る。</p> <p>[薬剤による防除法]</p> <p>1 育苗箱の消毒のため、ケミクロンGに浸漬する。 2 クロルピクリンくん蒸剤99.5%液剤*(F:-, I:8B)、又クロルピクリンくん蒸剤80.0%液剤*(F:-, I:8B)で土壌消毒する。立枯病の項を参照。</p>	<p>○ クロルピクリンくん蒸剤による土壌消毒は、育苗中の苗床に流れ込まないようにする。</p>								
<p><b>斑点病</b> 生育全期</p> <p>発病初期</p>	<p>[耕種的防除法]</p> <p>1 発病葉は早期に摘み取り、処分する。</p> <p>[薬剤による防除法]</p> <p>1 次の薬剤のいずれかを散布する。 ポリオキシシンAL水溶剤 (F:19) ポリオキシシンAL乳剤 (F:19) ※ダコニール1000 (F:M05) ステンレス (F:M03)</p>	<p>○ 過度のかん水をしない。 ○ 摘芯後の新芽伸長期から農薬の散布を行う。 ○ 斑点病の薬剤防除を行った場合には、黒点病の防除は必要ない。 ※印は、花き類・観葉植物としての登録。</p>								
<p><b>黒点病</b> 生育全期</p>	<p>[耕種的防除法]</p> <p>1 発病葉は早期に摘み取り、処分する。</p>	<p>○ 過度のかん水をしない。 ○ 黒点病は斑点病より低温期に発生しやすい。</p>								

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項
さび病 生育全期 発病初期	[耕種的防除法] 1 発病葉は早期に摘み取り、処分する。 [薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 ステンレス (F:M03) ジマンダイセン水和剤 (F:M03) エムダイファー水和剤 (F:M03) バシタック水和剤75 (F:7)	○ 赤系の品種は汚れが目立ちやすいので、その日の切り花が終わってから散布する。 ○ 開花期には、花の汚れの少ないステンレスを使用する。
疫病 植付前 生育中	[耕種的防除法] 1 床土、本圃の土壌を消毒する。 2 発病株はすみやかに抜き取る。 3 かん水を控え、とくに頭上からのかん水は避ける。	
モザイク病 挿芽前 生育全期	[耕種的防除法] 1 無病株から挿穂をとる。 2 汁液伝染を防止する。 [薬剤による防除法] 1 アブラムシ類を防除する。	○ 無病苗の導入を図る。 ○ 採穂用親株は再感染を極力防止する。
萎凋細菌病 生育全期 は種又は植付前21日前 は種又は植付前	[耕種的防除法] 1 さし穂は健全株から採穂する。 2 発病株はすみやかに抜き取る。 [薬剤による防除法] 1 次の薬剤では場を土壌消毒する。 (1)ディ・トラベックス油剤 (F:-, I:8F, 8A) 立枯病の項のクロロピクリンくん蒸剤を参照。 (2)ダゾメット粉粒剤* (F:-, I:8F) 土壌を耕起整地した後、全面に均一に散布して深さ25cmくらいまで土壌混和し、ビニール等で被覆する。被覆しない場合には鎮圧散水してガスの蒸散を防ぐ。処理3週間後に少なくとも2回以上耕起して十分にガス抜きを行ったのちは種又は植付けする。	○ ディ・トラベックス油剤は、住宅付近では使用しない。 ○ ダゾメット剤を使用する場合、茎腐病の防除の必要はない。 * [ダゾメット粉粒剤] バスマミド微粒剤、ガスタード微粒剤
茎腐病 生育全期	[耕種的防除法] 1 連作を避ける。 2 発病株はすみやかに抜き取る。	○ 病原菌は <i>Rhizoctonia</i> 属菌で寄主範囲が広く、宿根かすみそうやストックなどにも寄生する(H11年指導参考資料)。 ○ 育苗箱はケミクロンGに浸漬し消毒する。
灰色かび病 発病初期	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 ※サンヨール (F:M01) ※ポリベリン水和剤 (F:M07, 19) ジマンダイセン水和剤 (F:M03) エムダイファー水和剤 (F:M03)	○ 花き共通「灰色かび病」の項参照。 ※印は、花き類・観葉植物としての登録。
アブラムシ類 発生初期	[薬剤による防除法] 1 トレボン乳剤 (I:3A) を散布する。	
ハダニ類 発生初期	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 テルスター水和剤 (I:3A) テルスターフロアブル (I:3A) モレスタン水和剤 (I:UN) ダニカット乳剤20 (I:19) ※ダニトロンフロアブル (I:21A) ピラニカEW (I:21A) サンマイトフロアブル (I:21A)	○ 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一系統薬剤及び同一殺ダニ剤の連用は避ける。 ○ ダニトロンフロアブル、サンマイトフロアブル及びピラニカEWは薬剤抵抗性が発現するので、同一薬剤とみなす。 ○ ダニカット乳剤20は、蕾開裂前までとする。 ※印は、花き類・観葉植物としての登録。 ○ モレスタン水和剤は、開花時に薬害を生ずることがあるので注意する。

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項
<p><b>アザミウマ類</b></p> <p>発生初期</p> <p>発生初期</p>	<p>[耕種的防除法]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 アザミウマが寄生していない健全な苗を用いる。</li> <li>2 施設開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入を抑制する。</li> <li>3 ハウス開口部周辺の発生状況をよく観察し、早期発見に努める。</li> <li>4 ハウス内に青色粘着版を設置し、発生状況を把握する。</li> </ol> <p>[薬剤による防除法]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 次の薬剤のいずれかを散布する。 スミチオン乳剤 (I:1B) ※マラソン乳剤 (I:1B)</li> <li>2 次の薬剤のいずれかを株元に所定量散布する。 ※オンコル粒剤5 (I:1A) オルトラン粒剤 (I:1B)</li> </ol>	<p>※印は、花き類・観葉植物としての登録。</p>
<p><b>シロイチモジ ヨトウ</b></p> <p>発生初期</p>	<p>[薬剤による防除法]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 ※ロムダンフロアブル (I:18) を散布する。</li> </ol>	<p>※印は、花き類・観葉植物としての登録。</p>

## (2)掲載農薬一覧 (カーネーション)

農薬名	F R A C コード	I R A C コード	有効成分	適用病害虫名												
				斑点病	黒点病	萎凋細菌病	立枯病	萎凋病	茎腐病	さび病	灰色かび病	ハダニ類	アザミウマ類	アブラムシ類	シロイチモジヨトウ	
クロルピクリンくん蒸剤*		8B	クロルピクリン (99.5%液剤)				○	※								
クロルピクリンくん蒸剤*		8B	クロルピクリン (80.0%液剤)				○	※								
ディ・トラベックス油剤		8A	D-D													
		8F	メチルイソチオシアネート			○										
ダゾメット粉粒剤*		8F	ダゾメット			○										
サンヨール	M01		D B E D C									※				
ポリベリン水和剤	M07		イミノクタジン酢酸塩									※				
	19		ポリオキシシン複合体													
ポリオキシシンA L水溶剤	19		ポリオキシシン複合体	○												
ポリオキシシンA L乳剤	19		ポリオキシシン複合体	○												
ダコニール1000	M05		T P N	※												
ステンレス	M03		アンバム	○						○						
ジマンダイセン水和剤	M03	UN	マンゼブ							○	○					
エムダイファー水和剤	M03		マンネブ							○	○					
バシタック水和剤75	7		メプロニル							○						
タチガレン液剤	32		ヒドロキシイソキサゾールカリウム				○									
オルトラン粒剤		1B	アセフェート											○		
スミチオン乳剤		1B	M E P											○		
マラソン乳剤		1B	マラソン											※		
オンコル粒剤 5		1A	ベンフラカルブ											※		
ロムダンフロアブル		18	テブフェノジド													※
トレボン乳剤		3A	エトフェンブロックス												○	
テルスター水和剤		3A	ビフェントリン									○				
テルスターフロアブル		3A	ビフェントリン									○				
モレストン水和剤	M10	UN	キノキサリン系									○				
ダニカット乳剤20		19	アミトラズ									○				
ダニトロンフロアブル		21A	フェンピロキシメート									※				
ピラニカEW		21A	テブフェンピラド									○				
サンマイトフロアブル		21A	ピリダベン									○				

\*クロルピクリンくん蒸剤99.5%液剤：クロールピクリン

クロルピクリンくん蒸剤80.0%液剤：ドロクロール、ドジョウピクリン、クロピク80

ダゾメット粉粒剤：バスアミド微粒剤、ガスタード微粒剤

※印は、花き類・観葉植物としての登録。

4 ストック

(1) 防除方法

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項
立枯病 は種前	<p>[薬剤による防除法]</p> <p>1 ダゾメット粉粒剤* (F:-, I:8F) を、土壌を耕起整地した後、全面に均一に散布して深さ25cmくらいまで土壌混和し、ビニール等で被覆する。被覆しない場合には鎮圧散水してガスの蒸散を防ぐ。 処理3週間後に少なくとも2回以上耕起して十分にガス抜きを行ったのちは種又は植付けする。</p> <p>2 ホーマイ水和剤 (F:M03, 1) の溶液に種子を浸漬するか、粉末を種子に粉衣してからは種する。</p>	<p>* [ダゾメット粉粒剤] バスマイド微粒剤、ガスタード微粒剤</p>
萎凋病	<p>[薬剤による防除法]</p> <p>1 立枯病に準じてダゾメット粉粒剤* (F:-, I:8F) を処理する。</p>	
菌核病 生育全期  生育全期	<p>[耕種的防除法]</p> <p>1 施設では換気を図り過湿にならないようにする。 2 発病株は抜き取り処分する。</p> <p>[薬剤による防除法]</p> <p>1 次の薬剤のいずれかを散布する。 ※トップジンM水和剤 (F:1) ポリバリン水和剤 (F:M07, 19)</p>	<p>※印は、花き類・観葉植物としての登録。</p>
炭そ病 生育全期	<p>[耕種的防除法]</p> <p>1 被害残渣を抜き取り処分する。 2 かん水を控えめにし、過湿にならないよう管理する。</p>	
灰色かび病 生育全期	<p>[薬剤による防除法]</p> <p>1 ポリバリン水和剤 (F:M07, 19) を散布する。</p>	<p>○ 花き共通「灰色かび病」の項参照。</p>
モザイク病 生育全期	<p>[耕種的防除法]</p> <p>1 幼苗期に寒冷紗を被覆する。 2 発病株は早期に抜き取り処分する。</p> <p>[薬剤による防除法]</p> <p>1 アブラムシを防除する。</p>	
コナガ 発生初期	<p>[薬剤による防除法]</p> <p>1 次の薬剤のいずれかを散布する。 オルトラン水和剤 (I:1B) ノーモルト乳剤 (I:15) コテツフロアブル (I:13) アフーム乳剤 (I:6) トアロー水和剤CT (I:11A) バンレックス水和剤 (I:11A)</p> <p>2 次の薬剤のいずれかを株元散布するか、土壌に混和してから定植する。 オンコル粒剤5 (I:1A) ガゼット粒剤 (I:1A)</p>	<p>○ 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同系統薬剤の連用は避ける。</p> <p>○ オルトラン水和剤を散布すると、アザミウマ類の防除は必要ない。</p>
アザミウマ類	<p>[耕種的防除法]</p> <p>1 アザミウマが寄生していない健全な苗を用いる。 2 施設開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入を抑制する。 3 ハウス開口部周辺の発生状況をよく観察し、早期発見に努める。 4 ハウス内に青色粘着版を設置し、発生状況を把握する。</p>	

(2) 掲載農薬一覧（ストック）

農薬名	F R A C コード	I R A C コード	有効成分	適用病害虫名				
				苗立枯病	萎凋病	菌核病	灰色かび病	コナガ
ダゾメット粉粒剤*		8F	ダゾメット	※	○			
ホーマイ水和剤	M03		チウラム	○				
	1		チオファネートメチル					
トップジンM水和剤	1		チオファネートメチル			※		
ポリベリン水和剤	M07		イミノクタジン酢酸塩			○	○	
	19		ポリオキシシン複合体					
オルトラン水和剤		1B	アセフェート					○
ガゼット粒剤		1A	カルボスルファン					○
オンコル粒剤5		1A	ベンフラカルブ					○
ノーモルト乳剤		15	テフルベンズロン					○
コテツフロアブル		13	クロルフェナビル					○
アフアーム乳剤		6	エマメクチン安息香酸塩					○
トアロー水和剤C T		11A	B T (死菌)					○
バシレックス水和剤		11A	B T (生菌)					○

※印は、花き類・観葉植物としての登録。

\*ダゾメット粉粒剤：バスマイド微粒剤、ガスタード微粒剤

## 5 アスター

## (1) 防除方法

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項
苗立枯病 は種前	[薬剤による防除法] 1 次のいずれかで種子消毒をする。 ホームイ水和剤 (F:M03, 1) ホームイコート (F:M03, 1)	○ ホームイ水和剤、ホームイコートは「宿根アスター」には適用されない。
萎凋病 立枯病 生育全期	[耕種的防除法] 1 連作を避ける。 2 極端な乾燥地又は過湿地を避ける。 3 酸性土壌は石灰を使用して矯正する。 4 発病株は抜き取り処分する。	
斑点病 生育全期	[薬剤による防除法] 1 ※ダコニール1000 (F:M05) を散布する。	○ 窒素のやりすぎは過繁茂となり、斑点病の発生を助長する。 ○ アスターでは、薬害が発生した事例がある。
灰色かび病 生育全期		○ 花き共通「灰色かび病」の項参照。
T SWV 生育全期	[耕種的防除法] 1 発病株は抜き取り処分する。	○ 花き共通「トスポウイルス」の項参照。

## (2) 掲載農薬一覧 (アスター)

農薬名	F R A C コ ー ド	有効成分	適用病害名	
			苗立枯病	斑点病
ホームイ水和剤	M03	チウラム	○	
	1	チオファネートメチル		
ホームイコート	M03	チウラム	○	
	1	チオファネートメチル		
※ダコニール1000	M05	T P N		※

※印は、花き類・観葉植物としての登録。

6 りんどう

(1) 防除方法

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項												
<p><b>褐色根腐病</b></p> <p>植付前</p> <p>は種前</p> <p>植付前</p>	<p>[耕種的防除法]</p> <p>1 育苗床はりんどう栽培履歴の無い圃場につくる。</p> <p>2 消毒後に堆肥を十分施用する。</p> <p>3 無病苗を用いる。</p> <p>[薬剤による防除法]</p> <p>1 床土をていねいに切り返し、塊をほぐしてから高さ30cmに積み(広さは適宜)、表面を均平にする。専用のかん注機を使用して30cm間隔に深さ15cmの穴をあけ、クロルピクリンくん蒸99.5%液剤*(F:-, I:8B)又はクロルピクリンくん蒸80.0%液剤*(F:-, I:8B)を注入して足で穴をふさぐ。さらに30cmの高さに床土を積み同様に処理する。これをくりかえして適当な高さになったらポリエチレンフィルム等で被覆する。注入後7日以上被覆した後ポリエチレンフィルム等を除いてよく切りかえし、十分にガス抜きをしてから使用する。 処理時期は地温が15℃くらいのときがよい。</p> <p>2 畑の土壌をていねいに耕起整地してから、クロルピクリンくん蒸99.5%液剤*(F:-, I:8B)又はクロルピクリンくん蒸80.0%液剤*(F:-, I:8B)を専用のかん注機を使用して30cm千鳥で深さ約15cmに注入し、直ちに地表面をポリエチレンフィルム等で被覆する。ガスもれしないようにフィルムの端は土中に埋め込む。処理後10日以上経過(地温と被覆期間参照)してからポリエチレンフィルム等を除去し、再び耕起してガス抜きを行う。</p>	<p>○ クロルピクリンくん蒸剤及びこれらの混合剤を使用するときは、必ず土壌くん蒸用専用の防護マスクを着用するなど、「Ⅲ 使用上特に注意すべき農薬」p24の使用上の注意事項を遵守する。</p> <p>○ クロルピクリンは住宅や畜舎などの近くでは使用しない。</p> <p>○ 排水や日当たりの良い乾燥した場所で行う。</p> <p>○ 消毒時の床土は手でにぎり、放した場合に自然にひび割れする程度の湿度が適当である。</p> <p>○ ビニールは変性しやすいので使用しない。</p> <p>○ 地温が10℃以下の低温期では効果が劣る。</p> <table border="1" data-bbox="922 741 1222 853"> <thead> <tr> <th>処理時の地温(℃)</th> <th colspan="2">被覆期間(日)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>高温</td> <td>25～35</td> <td>7～10</td> </tr> <tr> <td>中温</td> <td>15～25</td> <td>10～15</td> </tr> <tr> <td>低温</td> <td>7～15</td> <td>20～30</td> </tr> </tbody> </table> <p>○ 資材の消毒 育苗用資材等は、床土と一緒に消毒する。</p> <p>○ 注入の時は風向きを考慮し、ガスを吸入しないように注意する。</p> <p>○ 除覆後、耕起してガス抜きをし、農薬の残臭のないことを確認してから播種又は定植をする。ガス抜きが不十分だと発芽障害、生育初期の生育不良を起こすので、粘土質土壌や連続降雨、あるいは注入量が多い場合は放置期間を長くするか耕起反転を十分に行って完全にガス抜きをする。特に低温処理の場合はガスが抜けにくいので注意が必要である。</p> <p>○ 施肥や酸度矯正のための石灰施用はガス抜き後に行う。薬剤注入前に施用すると、化学反応を起こして発芽障害や生育障害を起こす有害物が土壌中に形成されるので注意する。</p> <p>○ 消毒済みの床土には土壌病原菌や有害線虫が混入すると、激しい被害を招くことがあるので床土管理に注意し、無病種子や無病苗を植付けるようにする。</p> <p>○ クロルピクリンくん蒸剤を使用する場合、土壌線虫の防除は必要ない。</p> <p>* [クロルピクリンくん蒸99.5%液剤] クロールピクリン</p> <p>* [クロルピクリンくん蒸80.0%液剤] ドジョウピクリン、ドロクロール、クロピク80</p>	処理時の地温(℃)	被覆期間(日)		高温	25～35	7～10	中温	15～25	10～15	低温	7～15	20～30
処理時の地温(℃)	被覆期間(日)													
高温	25～35	7～10												
中温	15～25	10～15												
低温	7～15	20～30												
<p><b>土壌線虫</b></p> <p>植付前</p>	<p>[耕種的防除法]</p> <p>1 連作を避ける。</p>													

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項
モザイク病 挿芽前 生育全期	[耕種的防除法] 1 発病株から挿芽をとらない。 2 発病株はすみやかに抜き取る。 [薬剤による防除法] 1 アブラムシ類を防除する。	○ 発病株は、高温になるとマスキングされて判定しにくくなるので、生育初期に抜き取る。
葉枯病 生育全期	[耕種的防除法] 1 茎葉が枯死したら地上部をきれいに刈り取って処分する。 [薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 Zボルドー (F:M01) オーソサイド水和剤80 (F:M04) ピリカット乳剤 (F:39) ダコニール1000 (F:M05) ペフラン液剤25 (F:M07) ポリオキシシンAL水溶剤 (F:19)	
花腐菌核病 開花前	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 ペフラン液剤25 (F:M07) インダーフロアブル (F:3) トップジンM水和剤 (F:1) トップジンMゾル (F:1) ベンレート水和剤 (F:1) パレード20フロアブル (F:7)	○ トップジンM水和剤は、花に葉害を生ずるおそれがあるので開花後は散布しない。
褐斑病 発病前～ 発病初期	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する ダコニール1000 (F:M05) フルピカフロアブル (F:9) ストロビーフロアブル (F:11) ステンレス (F:M03) アフエットフロアブル (F:7)	○ 感染には葉の濡れが必要で、感染後2～3週間程度潜伏した後、発病する。 ○ 薬剤を6月下旬から10日おきに3～4回予防散布する。 ○ 潜伏期間があり、発病は通常7月下旬からである。
てんぐ巢病 生育全期	[耕種的防除法] 1 被害株は早期に抜き取り処分する。	○ 本病は、キマダラヒロヨコバイによって媒介される。
灰色かび病 生育全期	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する ※ゲッター水和剤 (F:10、1) ※ポリオキシシンAL水溶剤 (F:19) フルピカフロアブル (F:9)	○ 花き共通「灰色かび病」の項参照。 ※印は、花き類・観葉植物としての登録。
黒斑病 発病初期	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 アフエットフロアブル (F:7) パレード20フロアブル (F:7)	
アブラムシ類 発生初期	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する ※アドマイヤーフロアブル (I:4A) ※ジノテフラン水溶剤* (I:4A)	※印は、花き類・観葉植物としての登録。 * [ジノテフラン水溶剤] スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項
アザミウマ類 発生初期	<p>[耕種的防除法]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>アザミウマが寄生していない健全な苗を用いる。</li> <li>施設開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入を抑制する。</li> <li>ハウス開口部周辺の発生状況をよく観察し、早期発見に努める。</li> <li>ハウス内に青色粘着版を設置し、発生状況を把握する。</li> </ol> <p>[薬剤による防除法]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>※オルトラン粒剤 (I:1B) 又は※ジェイエース粒剤 (I:1B) を株元に処理する。</li> <li>次の薬剤のいずれかを散布する。  ※オルトラン水和剤 (I:1B)  ※ジェイエース水溶剤 (I:1B)  モスピラン顆粒水溶剤 (I:4A)  スミチオン乳剤 (I:1B)  スカウトフロアブル (I:3A)  トレボン乳剤 (I:3A)  アディオフロアブル (I:3A)</li> </ol>	<p>※印は、花き類・観葉植物としての登録。</p> <p>○ スミチオン乳剤、アディオフロアブル、スカウトフロアブル、トレボン乳剤は、ヒラズハナアザミウマとしての登録。</p>
リンドウホソハマキ 発生初期	<p>[薬剤による防除法]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>次の薬剤のいずれかを散布する  アディオフロアブル (I:3A)  ノーモルト乳剤 (I:15)  ディアナSC (I:5)  モスピラン顆粒水溶剤 (I:4A)</li> </ol>	
ハダニ類 発生初期	<p>[薬剤による防除法]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>次の薬剤のいずれかを散布する  ※ニッソラン水和剤 (I:10A)  ※ピラニカEW (I:21A)  ※カネマイトフロアブル (I:20B)  スターマイトフロアブル (I:25A)</li> </ol>	<p>※印は、花き類・観葉植物としての登録。</p>
クロバネキノ コバエ類 育苗期	<p>[耕種的防除法]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>有機質資材を過度に施用しない。</li> <li>排水をよくする。</li> <li>被害株は圃場外に持ち出し処分する。</li> </ol>	<p>○ 表土でクモの巣状の糸の有無により、幼虫を確認することができる。</p>

## (2)掲載農薬一覧(りんどう)

農薬名	F R A C コード	I R A C コード	有効成分	適用病害虫名												
				葉枯病	花腐菌核病	褐色根腐病	灰色かび病	褐斑病	黒斑病	リンドウホンハマキ	アブラムシ類	アザミウマ類	ヒラズハナアザミウマ	ハダニ類	クロバネキノコバエ類	
クロルピクリンくん蒸剤*		8B	クロルピクリン (99.5%液剤)			○										
クロルピクリンくん蒸剤*		8B	クロルピクリン (80.0%液剤)			○										
Zボルドー	M01		塩基性硫酸銅	○												
オーソサイド水和剤80	M04		キャプタン	○												
ピリカット乳剤	39		ジフルメトリム	○												
ダコニール1000	M05		T P N	○				○								
ベフラン液剤25	M07		イミノクタジン酢酸塩	○	○											
インダーフロアブル	3		フェンブコナゾール		○											
トップジンM水和剤	1		チオファネートメチル		○											
トップジンMゾル	1		チオファネートメチル		○											
ベンレート水和剤	1		ベノミル		○											
ゲッター水和剤	10		ジエトフェンカルブ				※									
	1		チオファネートメチル													
ポリオキシシンAL水溶剤	19		ポリオキシシン複合体	○			※									
フルピカフロアブル	9		メバニピリム				○	○								
ストロビーフロアブル	11		クレソキシムメチル					○								
ステンレス	M03		アンバム					○								
アフェットフロアブル	7		ペンチオピラド					○	○							
パレード20フロアブル	7		ピラジフルミド		○				○							
オルトラン水和剤	1B		アセフェート										※			
ジェイエース水溶剤	1B		アセフェート										※			
オルトラン粒剤	1B		アセフェート										※			
ジェイエース粒剤	1B		アセフェート										※			
スミチオン乳剤	1B		ME P											○		
スカウトフロアブル	3A		トラロメトリン											○		
トレボン乳剤	3A		エトフェンプロックス											○		
アディオフロアブル	3A		ペルメトリン						○					○		
ノーモルト乳剤	15		テフルベンズロン						○							
ディアナSC	5		スピネトラム						○							
モスピラン顆粒水溶剤	4A		アセタミプリド						○		○					
アドマイヤーフロアブル	4A		イミダクロプリド									※				
ジノテフラン水溶剤*	4A		ジノテフラン									※				
ニッソラン水和剤	10A		ヘキシチアゾクス												※	
ピラニカEW	21A		テブフェンピラド												※	
カネマイトフロアブル	20B		アセキノシル												※	
スターマイトフロアブル	25A		シエノピラフェン												○	

\*クロルピクリンくん蒸剤99.5%液剤：クロールピクリン  
 クロルピクリンくん蒸剤80.0%液剤：ドロクロール、ドジョウピクリン、クロピク80  
 ジノテフラン水溶剤：スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤

※印は、花き類・観葉植物としての登録。

7 宿根かすみそう

(1) 防除方法

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項
うどんこ病 発病初期	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 ※トリフミン水和剤 (F:3) ピリカット乳剤 (F:39)	○ 株元葉での早期発見に努め、発生初期から防除を行う。 ○ トリフミン水和剤は、薬剤耐性菌のおそれがあるので連用は避ける。 ○ 花き類・観葉植物としてうどんこ病に登録のあるポリオキシシリンAL水溶剤は、薬害発生のおそれがあるので使用しない。 ※印は、花き類・観葉植物としての登録。
アブラムシ類 発生初期	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 アディオンフロアブル (I:3A) スカウトフロアブル (I:3A) ※モスピラン顆粒水溶剤 (I:4A)	○ 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同系統薬剤の連用は避ける。 ※印は、花き類・観葉植物としての登録。
ハダニ類 発生初期	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 マブリック水和剤20 (I:3A) ※ピラニカEW (I:21A) コロマイト乳剤 (I:6)	○ 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同系統薬剤の連用は避ける。 ※印は、花き類・観葉植物としての登録。
ヨトウムシ 発生期	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 トクチオン乳剤 (I:1B) スカウトフロアブル (I:3A) アディオンフロアブル (I:3A) トレボン乳剤 (I:3A)	

(2) 掲載農薬一覧 (宿根かすみそう)

農薬名	FRACコード	IRACコード	有効成分	適用病害虫名			
				うどんこ病	アブラムシ類	ハダニ類	ヨトウムシ
ピリカット乳剤	39		ジフルメトリム	○			
トリフミン水和剤	3		トリフルミゾール	※			
モスピラン顆粒水溶剤		4A	アセタミプリド		※		
トクチオン乳剤		1B	プロチオホス				○
スカウトフロアブル		3A	トラロメトリン		○		○
アディオンフロアブル		3A	ペルメトリン		○		○
トレボン乳剤		3A	エトフェンプロックス				○
マブリック水和剤20		3A	フルバリネート			○	
ピラニカEW		21A	テブフェンピラド			※	
コロマイト乳剤		6	ミルベメクチン			○	

※印は、花き類・観葉植物としての登録。

## 8 トルコギキョウ

## (1) 防除方法

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項												
灰色かび病 生育全期	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 ※ゲッター水和剤 (F:10, I) ※ポリオキシシロリン酸水溶剤 (F:19) ※フルピカフロアブル (F:9)	○ 花き共通「灰色かび病」の項参照。 ※印は、花き類・観葉植物としての登録。												
根腐病 植付前	[薬剤による防除法] 1 クロビクテープ (F:-, I:8B) で土壌消毒する。 耕起整地後、90cm幅でうねを立て、うね中央に約15cmの深さの溝を掘り、本剤を溝に敷いて直ちに覆土する。覆土後ポリエチレンフィルム等で被覆し、処理10日以上経過(地温と被覆期間参照)してからポリエチレンフィルム等を除去し、再び耕起してガス抜きを行う。	○ 住宅や畜舎などの近くでは使用しない。 ○ クロルピクリンくん蒸剤及びこれらの混合剤を使用するときは、必ず土壌くん蒸用専用の防護マスクを着用するなど、「Ⅲ 使用上特に注意すべき農薬」p24の使用上の注意事項を遵守する。 ○ ビニールは変性しやすいので使用しない。 ○ 地温が10℃以下の低温期では効果が劣る。 <table border="1"> <thead> <tr> <th>処理時の地温(℃)</th> <th colspan="2">被覆期間(日)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>高温</td> <td>25～35</td> <td>7～10</td> </tr> <tr> <td>中温</td> <td>15～25</td> <td>10～15</td> </tr> <tr> <td>低温</td> <td>7～15</td> <td>20～30</td> </tr> </tbody> </table> ○ 除覆後、耕起してガス抜きをし、農薬の残臭のないことを確認してから播種又は定植をする。ガス抜きが不十分だと発芽障害、生育初期の生育不良を起こすので、粘土質土壌や連続降雨、あるいは注入量が多い場合は放置期間を長くするか耕起反転を十分に行って完全にガス抜きをする。特に低温処理の場合はガスが抜けにくいので注意が必要である。 ○ 施肥や酸度矯正のための石灰施用はガス抜き後に行う。薬剤注入前に施用すると、化学反応を起こして発芽障害や生育障害を起こす有害物が土壌中に形成されるので注意する。	処理時の地温(℃)	被覆期間(日)		高温	25～35	7～10	中温	15～25	10～15	低温	7～15	20～30
処理時の地温(℃)	被覆期間(日)													
高温	25～35	7～10												
中温	15～25	10～15												
低温	7～15	20～30												
モザイク病 生育全期	[耕種的防除法] 1 健全株を植え付ける。 2 発病株は見つけ次第抜き取る。 3 寒冷紗などでアブラムシの侵入を阻止する。 [薬剤による防除法] 1 アブラムシ類の防除を行う。	○ 本県では、キュウリモザイクウイルス(CMV)、ソラマメウルトウイルス(BBWV)の発生が多い。 ○ いずれもアブラムシで伝染し、病原ウイルスの寄主範囲はかなり広い。												
黄化えそ病 生育全期	[耕種的防除法] 1 発病株は見つけ次第抜き取る。 2 施設開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入を抑制する。 [薬剤による防除法] 1 アザミウマ類の防除を行う。	○ 病原はトマト黄化えそウイルス(TSWV)である。 ○ 花き共通「トスポウイルス」の項参照。 ○ アザミウマ類が媒介し、病原ウイルスの寄主範囲は、野菜、花き、雑草など、かなり広い。												
えそ斑紋病 生育全期	[耕種的防除法] 1 発病株は見つけ次第抜き取る。 2 施設開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入を抑制する。 [薬剤による防除法] 1 アザミウマ類の防除を行う。	○ 病原はインパチエンスネクロティックスポットウイルス(INSV)である。 ○ 花き共通「トスポウイルス」の項参照。 ○ アザミウマ類が媒介し、病原ウイルスの寄主範囲は、野菜、花き、雑草など、かなり広い。												

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項
アブラムシ類 発生初期	[薬剤による防除法] 1 くん煙法 ハウスを密封後、モスピランジェット (I:4A) でくん煙する。	
ハダニ類 発生初期	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤を散布する。 ※ピラニカEW (I:21A)	※印は、花き類・観葉植物としての登録。
アザミウマ類  発生初期	[耕種的防除法] 1 アザミウマが寄生していない健全な苗を用いる。 2 施設開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入を抑制する。 3 ハウス開口部周辺の発生状況をよく観察し、早期発見に努める。 4 ハウス内に青色粘着板を設置し、発生状況を把握する。 [薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを株元に所定量散布する。 ※オルトラン粒剤 (I:1B) ジェイエース粒剤 (I:1B) 2 次の薬剤のいずれかを散布する。 ※オルトラン水和剤 (I:1B) スカウトフロアブル (I:3A) マブリック水和剤20 (I:3A) アディオフロアブル (I:3A)	※印は、花き類・観葉植物としての登録。  ○ アディオフロアブルは、ヒラズハナアザミウマとしての登録。 ○ アディオフロアブル、スカウトフロアブル、マブリック水和剤20は、ミカンキイロアザミウマに対する防除効果が劣ることがあるので注意する。
ミカンキイロアザミウマ 発生初期	[薬剤による防除法] 1 ※コテツフロアブル (I:13) を散布する。	※印は、花き類・観葉植物としての登録。
クロバネキノコバエ類 発生初期	[耕種的防除法] 1 有機質資材を過度に施用しない。 2 排水をよくする。 3 被害株は圃場外に持ち出し処分する。	
ハスモンヨトウ 発生時	[薬剤による防除法] 1 トレボン乳剤 (I:3A) を散布する。	

(2) 掲載農薬一覧（トルコギキョウ）

農薬名	F R A C コ ー ド	I R A C コ ー ド	有効成分	適用病害虫名									
				根腐病	灰色かび病	アブラムシ類	ハダニ類	アザミウマ類	ミカンキイロアザミウマ	ヒラズハナアザミウマ	クロバネキノコバエ類	ハスモンヨトウ	
クロルピクリンくん蒸剤55.0%製剤*		8B	クロルピクリン（55.0%製剤）	○									
ゲッター水和剤	10		ジエトフェンカルブ		※								
	1		チオファネートメチル										
ポリオキシシAL水溶剤		19	ポリオキシシン複合体		※								
フルピカフロアブル		9	メパニピリム		※								
モスピランジェット		4A	アセタミプリド			○							
オルトラン水和剤		1B	アセフェート					※					
オルトラン粒剤		1B	アセフェート					※					
ジェイエース粒剤		1B	アセフェート					○					
スカウトフロアブル		3A	トラロメトリン					○					
マブリック水和剤20		3A	フルバリネート					○					
アディオンフロアブル		3A	ペルメトリン							○			
トレボン乳剤		3A	エトフェンプロックス										○
コテツフロアブル		13	クロルフェナピル						※				
ピラニカEW		21A	テブフェンピラド				※						

\*クロルピクリンくん蒸剤：クロピクテープ

※印は、花き類・観葉植物としての登録。

9 スターチス類

(1) 防除方法

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項
灰色かび病 発病初期	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 サンヨール (F:M01) ※ゲッター水和剤 (F:10, 1) ロブラール水和剤 (F:2) ※ポリオキシンAL水溶剤 (F:19) ポリベリン水和剤 (F:M07, 19) フルピカフロアブル (F:9)	○ 花き共通「灰色かび病」の項参照。 ※印は、花き類・観葉植物としての登録。
うどんこ病 発病初期	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 ポリベリン水和剤 (F:M07, 19) フルピカフロアブル (F:9) ※ピリカット乳剤 (F:39)	○ 病原菌は花茎抽出前の株元葉の裏で増殖し、伝染する。このため、株元葉での早期発見に努め、適切な防除を行う。 ※印は、花き類・観葉植物としての登録。
ウイルス病 (TSWV) 生育全期	[耕種的防除法] 1 発病株は見つけ次第抜き取る。 2 施設開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入を抑制する。	○ アザミウマ類が媒介し、病原ウイルスの寄主範囲は、野菜、花き、雑草など、かなり広い。 ○ 花き共通「トスポウイルス」の項参照。
ヨトウムシ類 発生時	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 アディオフロアブル (I:3A) カスケード乳剤 (I:15)	○ アディオフロアブルはヨトウムシとしての登録 ○ カスケード乳剤はシロイチモジヨトウ、ハスモンヨトウとしての登録。

(2) 掲載農薬一覧 (スターチス類)

農薬名	F R A C コード	I R A C コード	有効成分	適用病害虫名				
				灰色かび病	うどんこ病	ヨトウムシ	シロイチモジヨトウ	ハスモンヨトウ
サンヨール	M01		DBEDC	○				
ゲッター水和剤	10		ジエトフェンカルブ	※				
	1		チオファネートメチル					
ロブラール水和剤	2		イプロジオン	○				
ポリオキシンAL水溶剤	19		ポリオキシン複合体	※				
ポリベリン水和剤	M07		イミノクタジン酢酸塩	○	○			
	19		ポリオキシン複合体					
フルピカフロアブル	9		メバニピリム	○	○			
ピリカット乳剤	39		ジフルメトリム		※			
アディオフロアブル		3A	ベルメトリン			○		
カスケード乳剤		15	フルフェノクスロン				○	○

※印は、花き類・観葉植物としての登録。

10 デルフィニウム

(1) 防除方法

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項
立枯病 定植前 生育期	[薬剤による防除法] 1 定植前に※リゾレックス粉剤 (F:14) を土壌混和する。 2 ※リゾレックス水和剤 (F:14) を土壌かん注する。	※印は、花き類・観葉植物としての登録。
うどんこ病 発病初期	[薬剤による防除法] 1 次のいずれかの薬剤を散布する。 ※ポリオキシシンAL水溶剤 (F:19) ※モレスタン水和剤 (F:M10) ※サンヨール (F:M01) ※カリグリーン (F:NC)	※印は、花き類・観葉植物としての登録。
ヨトウムシ類 発生初期	[薬剤による防除法] 1 次のいずれかの薬剤を散布する。 ※オルトラン水和剤 (I:1B) ※アディオオン乳剤 (I:3A) ※アフアーム乳剤 (I:6) ※コテツフロアブル (I:13) ※ノーモルト乳剤 (I:15)	※印は、花き類・観葉植物としての登録。

(2) 掲載農薬一覧 (デルフィニウム)

農薬名	F R A C コ ー ド	I R A C コ ー ド	有効成分	適用病害虫名		
				立 枯 病	う ど ん こ 病	ヨ ト ウ ム シ 類
リゾレックス粉剤	14		トルクロホスメチル	※		
リゾレックス水和剤	14		トルクロホスメチル	※		
ポリオキシシンAL水溶剤	19		ポリオキシシン複合体		※	
モレスタン水和剤	M10	UN	キノキサリン系		※	
サンヨール	M01		DBEDC		※	
カリグリーン	NC		炭酸水素カリウム		※	
オルトラン水和剤		1B	アセフェート			※
アディオオン乳剤		3A	ペルメトリン			※
アフアーム乳剤		6	エマメクチン安息香酸塩			※
コテツフロアブル		13	クロルフェナピル			※
ノーモルト乳剤		15	テフルベンズロン			※

※印は、花き類・観葉植物としての登録。

11 ばら

(1) 防除方法

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項
<b>黒星病</b> 生育全期	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 ジマンダイセン水和剤 (F:M03) ダコニール1000 (F:M05) フルピカフロアブル (F:9) トップジンM水和剤 (F:1) サプロール乳剤 (F:3) マネージ乳剤 (F:3) ラリー乳剤 (F:3)	○ 展葉中の若葉が侵されやすいので、萌芽から枝の伸長期を重点に降雨の前後に十分散布する。
<b>うどんこ病</b> 生育全期	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 サプロール乳剤 (F:3) ルビゲン水和剤 (F:3) トリフミン水和剤 (F:3) マネージ乳剤 (F:3) ラリー乳剤 (F:3) トップジンM水和剤 (F:1) ※モレスタン水和剤 (F:M10) サンヨール (F:M01) ※カリグリーン (F:NC) ※ピリカット乳剤 (F:39) ポリオキシシンAL乳剤 (F:19) フルピカフロアブル (F:9) バレード20フロアブル (F:7)  2 次の薬剤のいずれかでくん煙する。 トリフミンジェット (F:3) 硫黄粒剤 (F:M02)	○ EBI剤は、薬剤耐性菌発生のおそれがあるので連用を避ける。  ※印は、花き類・観葉植物としての登録。 ○ モレスタン水和剤は、高温のとき葉害が発生しやすいので注意する。  ○ 夕方から翌朝までの間にくん煙する。 ○ 翌朝、十分換気した後入室する。 ○ 硫黄粒剤は専用の蒸散器やくん煙器を使用し、農薬使用基準と機器の取扱説明書に従って使用する。
<b>灰色かび病</b> 生育全期	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 エムダイファー水和剤 (F:M03) ジマンダイセン水和剤 (F:M03) ポリベリン水和剤 (F:M07, 19) サンヨール (F:M01)	○ 花き共通「灰色かび病」の項参照。
<b>べと病</b> 生育全期	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 ステンレス (F:M03) エムダイファー水和剤 (F:M03) ジマンダイセン水和剤 (F:M03)	
<b>さび病</b> 生育全期	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 エムダイファー水和剤 (F:M03) ジマンダイセン水和剤 (F:M03)	
<b>枝枯病</b> <b>腐らん病</b> <b>すそ枯病</b> 生育全期	[耕種的防除法] 1 罹病枝は切り取り、処分する。	

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項
<p><b>根頭がんしゅ病</b> 定植前 生育全期</p> <p>は種又は 植付け前</p>	<p>[耕種的防除法]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 無病苗を選んで植付ける。</li> <li>2 発病株は早めに抜き取り処分する。</li> </ol> <p>[薬剤による防除法]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 ※ダゾメット粉粒剤* (I:8F) を、土壌を耕起整地した後、全面に均一に散布して深さ25cmくらいまで土壌混和し、ビニール等で被覆する。被覆しない場合には鎮圧散水してガスの蒸散を防ぐ。 処理3週間後に少なくとも2回以上耕起して十分にガス抜きを行ったのちは種又は植付けする。</li> </ol>	<p>○ 罹病株の根や枝を切った刃物は、熱湯で消毒する。</p> <p>* [ダゾメット粉粒剤] バスアミド微粒剤、ガスタード微粒剤 ※印は、花き類・観葉植物としての登録。</p>
<p><b>アブラムシ類</b> 発生時</p>	<p>[薬剤による防除法]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 次の薬剤のいずれかを散布する。 ※マラソン乳剤 (I:1B) スミチオン乳剤 (I:1B) ※オルトラン水和剤 (I:1B) ジェイエース水溶剤 (I:1B) ※モスピラン顆粒水溶剤 (I:4A) ベストガード水溶剤 (I:4A) ※アドマイヤーフロアブル (I:4A) ※ダントツ水溶剤 (I:4A) ※ジノテフラン水溶剤* (I:4A) マブリック水和剤20 (I:3A) ※スカウトフロアブル (I:3A)</li> <li>2 次の粒剤のいずれかを株元に所定量散布する。 ※オルトラン粒剤 (I:1B) ※ジェイエース粒剤 (I:1B) ※ベストガード粒剤 (I:4A) ※ダントツ粒剤 (I:4A)</li> </ol>	<p>※印は、花き類・観葉植物としての登録。</p> <p>* [ジノテフラン水溶剤] アルバリン顆粒水溶剤、スタークル顆粒水溶剤</p>
<p><b>アザミウマ類</b></p> <p>発生時</p>	<p>[耕種的防除法]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 アザミウマが寄生していない健全な苗を用いる。</li> <li>2 施設開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入を抑制する。</li> <li>3 ハウス開口部周辺の発生状況をよく観察し、早期発見に努める。</li> <li>4 ハウス内に青色粘着板を設置し、発生状況を把握する。</li> </ol> <p>[薬剤による防除法]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 次の薬剤のいずれかを散布する。 ※オルトラン水和剤 (I:1B) ジェイエース水溶剤 (I:1B) ※モスピラン顆粒水溶剤 (I:4A)</li> </ol>	<p>※印は、花き類・観葉植物としての登録。</p>
<p><b>ミカンキイロ</b> <b>アザミウマ</b> 発生初期</p>	<p>[薬剤による防除法]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 次の薬剤のいずれかを散布する。 # ジェイエース水溶剤 (I:1B) ベストガード水溶剤 (I:4A) カスケード乳剤 (I:15)</li> </ol>	<p>○ 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同系統薬剤の連用は避ける。 # アザミウマ類での登録</p>
<p><b>ハダニ類</b> 発生時</p>	<p>[薬剤による防除法]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 次の薬剤のいずれかを散布する。 カスケード乳剤 (I:15) ※テデオン水和剤 (I:12D) ダニカット乳剤20 (I:19) # ペンタック水和剤 (I:2A) ※ポリオキシンA L 水溶剤 (I:-, F:19)</li> </ol>	<p>○ 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同系統薬剤及び同一殺ダニ剤の連用は避ける。 ※印は、花き類・観葉植物としての登録。 # ペンタック水和剤は施設栽培で登録。</p>

(2) 掲載農薬一覧 (ばら)

農薬名	F R A C コード	I R A C コード	有効成分	適用病害虫名												
				黒 星 病	べ と 病	さ び 病	灰 色 か び 病	う ど ん こ 病	根 頭 が ん し ゆ 病	ア ブ ラ ム シ 類	ハ ダ ニ 類	ア ザ ミ ウ マ 類	ミ カ ン キ イ ロ ア ザ ミ ウ マ			
ステンレス	M03		アンバム		○											
エムダイファー水和剤	M03		マンネブ		○	○	○									
ジマンダイセン水和剤	M03	UN	マンゼブ	○	○	○	○									
ダコニール1000	M05		T P N	○												
フルピカフロアブル	9		メパニピリム	○				○								
トップジンM水和剤	1		チオファネートメチル	○				○								
サブロール乳剤	3		トリホリン	○				○								
マネージ乳剤	3		イミベンコナゾール	○				○								
ラリー乳剤	3		ミクロブタニル	○				○								
ルビゲン水和剤	3		フェナリモル					○								
トリフミン水和剤	3		トリフルミゾール					○								
トリフミンジェット	3		トリフルミゾール					○								
モレスタン水和剤	M10	UN	キノキサリン系					※								
ピリカット乳剤	39		ジフルメトリム					※								
カリグリーン	NC		炭酸水素カリウム					※								
硫黄粒剤	M02	UN	硫黄					○								
ポリオキシシ A L 乳剤	19		ポリオキシシン複合体					○								
パレード20フロアブル	7		ピラジフルミド					○								
ポリベリン水和剤	M07		イミノクタジン酢酸塩					○								
	19		ポリオキシシン複合体													
サンヨール	M01		D B E D C				○	○								
ダゾメット粉粒剤*		8F	ダゾメット							※						
マラソン乳剤		1B	マラソン							※						
スミチオン乳剤		1B	M E P							○						
オルトラン粒剤		1B	アセフェート							※						
ジェイエース粒剤		1B	アセフェート							※						
オルトラン水和剤		1B	アセフェート							※			※			
ジェイエース水溶剤		1B	アセフェート							○			○			
モスピラン顆粒水溶剤		4A	アセタミプリド							※			※			
ベストガード水溶剤		4A	ニテンピラム													○
ベストガード粒剤		4A	ニテンピラム							※						
アドマイヤーフロアブル		4A	イミダクロプリド							※						
ダントツ粒剤		4A	クロチアニジン							※						
ダントツ水溶剤		4A	クロチアニジン							※						
ジノテフラン水溶剤*		4A	ジノテフラン							※						
マブリック水和剤20		3A	フルバリネート							○						
スカウトフロアブル		3A	トラロメトリン							※						
ダニカット乳剤20		19	アミトラズ										○			
ポリオキシシ A L 水溶剤	19		ポリオキシシン複合体										※			
テデオン水和剤		12D	テトラジホン										※			
ペンタック水和剤		2A	ジェノクロル									○#				
カスケード乳剤		15	フルフェノクスロン									○				○

\*ダゾメット粉粒剤：バスアミド微粒剤、ガスタード微粒剤

ジノテフラン水溶剤：アルバリン顆粒水溶剤、スタークル顆粒水溶剤

※印は、花き類・観葉植物としての登録。

#ばら（施設栽培）での登録。

12 グラジオラス

(1) 防除方法

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項
首腐病 植付時 生育全期	[耕種的防除法] 1 連作を避け、排水を良くする。 2 種球(球茎、木子)は無病地から選ぶ。 3 発病株は見つけ次第抜き取り処分する。 4 収穫後は土をよく落とし、十分に乾燥する。	
球根腐敗病 (フザリウム腐敗病) 掘取後及び 植付前 生育全期	[耕種的防除法] 1 連作を避ける。 2 無病の種球(球茎、木子)を使用する。 3 発病株は見つけ次第まわりの土とともに取り除き、処分する。 [薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかで種球を湿粉衣し、消毒する。 ホームイ水和剤 (F:M03, 1) ホームイコート (F:M03, 1)	
硬化病 植付時 生育全期	[耕種的防除法] 1 連作を避ける。 2 無病の種球(球茎、木子)を使用する。 3 密植を避け通風をよくする。 4 発病葉は見つけ次第摘み取り処分する。	
斑点病 葉枯病 生育全期	[耕種的防除法] 1 発病葉は取り除いて処分する。	
赤斑病 植付前 発病初期	[耕種的防除法] 1 低湿地、排水不良地での栽培を避ける。 [薬剤による防除法] 1 ポリオキシシンAL水溶剤 (F:19) を散布する。	
モザイク病 植付時 生育全期	[耕種的防除法] 1 健全な親株から小球を取る。 2 発病株は見つけ次第抜き取り処分する。 [薬剤による防除法] 1 アブラムシを防除する。	
ヨトウガ 発生初期	[薬剤による防除法] 1 ※オルトラン水和剤 (I:1B) を散布する。	※印は、花き類・観葉植物としての登録。
アザミウマ類 植付時 発生初期	[耕種的防除法] 1 アザミウマが寄生していない健全な苗を用いる。 2 施設開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入を抑制する。 3 ハウス開口部周辺の発生状況をよく観察し、早期発見に努める。 4 ハウス内に青色粘着板を設置し、発生状況を把握する。 [薬剤による防除法] 1 球根をオルトラン水和剤に浸漬後植え付ける。 2 次の薬剤のいずれかを散布する。 スカウトフロアブル (I:3A) ※ジェイエース水溶剤 (I:1B) ※オルトラン水和剤 (I:1B)	※印は、花き類・観葉植物としての登録。
グラジオラス アザミウマ 発生初期	[薬剤による防除法] 1 ※ジェイエース水溶剤 (I:1B) を散布する。	※印は、花き類・観葉植物としての登録。

(2) 掲載農薬一覧（グラジオラス）

農薬名	F R A C コード	I R A C コード	有効成分	適用病害虫名				
				球根腐敗病	赤斑病	アザミウマ類	グラジオラスアザミウマ	ヨトウムシ類
ホームイ水和剤	M03		チウラム	○				
	1		チオファネートメチル					
ホームイコート	M03		チウラム	○				
	1		チオファネートメチル					
ポリオキシシンAL水溶剤	19		ポリオキシシン複合体		○			
スカウトフロアブル		3A	トラロメトリン			○		
ジェイエース水溶剤		1B	アセフェート			※	x)	
オルトラン水和剤		1B	アセフェート			○		※

※印は、花き類・観葉植物としての登録。

x)印は、グラジオラスアザミウマ→アザミウマ類へ、登録拡大となったものを示す。

13 ゆり

(1) 防除方法

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項
<b>葉枯病</b> 植付時 生育全期 生育全期	[耕種的防除法] 1 密植を避ける。 2 発病葉は見つけ次第摘み取り処分する。 [薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 トップジンM水和剤 (F:1) ダコニール1000 (F:M05) フロンサイド水和剤 (F:29) フルピカフロアブル (F:9) ピカットフロアブル (F:7,9) ポリオキシシンAL水溶剤 (F:19)	
<b>モザイク病</b> 収穫時 生育全期	[耕種的防除法] 1 繁殖用の球根は健全株から取る。 2 発病株は見つけ次第抜き取り処分する。 [薬剤による防除法] 1 アブラムシを防除する。	
<b>腐敗病</b> 収穫後	[耕種的防除法] 1 球根はなるべく傷をつけないようにし、通風のよい比較的低温の所に貯蔵する。	
<b>アブラムシ類</b> 発生初期	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを株元に所定量散布する。 ※オルトラン粒剤 (I:1B) ※ジェイエース粒剤 (I:1B) ※ベストガード粒剤 (I:4A) 2 次の薬剤のいずれかを散布する。 ※マラソン乳剤 (I:1B) ※オルトラン水和剤 (I:1B) ※ジェイエース水溶剤 (I:1B) トレボン乳剤 (I:3A) ※アドマイヤーフロアブル (I:4A) ※ベストガード水溶剤 (I:4A)	※印は、花き類・観葉植物としての登録。 ○ 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同系統薬剤の連用は避ける。

(2) 掲載農薬一覧 (ゆり)

農薬名	F R A C C o d e	I R A C C o d e	有効成分	適用病害虫名	
				葉枯病	アブラムシ類
トップジンM水和剤	1		チオファネートメチル	○	
ダコニール1000	M05		T P N	○	
フロンサイド水和剤	29		フルアジナム	○	
フルピカフロアブル	9		メパニピリム	○	
ピカットフロアブル	7		ベンチオピラド	○	
	9		メパニピリム		
ポリオキシシンAL水溶剤	19		ポリオキシシン複合体	○	
マラソン乳剤		1B	マラソン		※
オルトラン水和剤		1B	アセフェート		※
ジェイエース水溶剤		1B	アセフェート		※
オルトラン粒剤		1B	アセフェート		※
ジェイエース粒剤		1B	アセフェート		※
トレボン乳剤		3A	エトフェンプロックス		○
アドマイヤーフロアブル		4A	イミダクロプリド		※
ベストガード水溶剤		4A	ニテンピラム		※
ベストガード粒剤		4A	ニテンピラム		※

※印は、花き類・観葉植物としての登録。

14 チューリップ

(1) 防除方法

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項
<b>球根腐敗病</b> 植付前  生育全期  植付前  掘取後及び植付前	[耕種的防除法] 1 発病球は除去する。 2 連作を避ける。 3 排水を良くする。 4 有機質肥料、窒素質肥料の過用は避ける。 5 発病株は見つけ次第抜き取り処分する。 6 収穫期に球根を傷つけないよう注意し、十分に乾燥する。  [薬剤による防除法] 1 ※ダゾメット粉粒剤*(F:-, I:8F)を、土壌を耕起整地した後、全面に均一に散布して深さ25cmくらいまで土壌混和し、ビニール等で被覆する。被覆しない場合には鎮圧散水してガスの蒸散を防ぐ。処理3週間後に少なくとも2回以上耕起して十分にガス抜きを行ったのちは種又は植付けする。  2 掘り上げ直後か植付前に球根を、次の薬剤のいずれか方法で消毒する。 (1) 粉衣消毒 トップジンM水和剤 (F:1) ホーマイ水和剤 (F:M03, 1) トリフミン水和剤 (F:3) (2) 浸漬消毒 ホーマイ水和剤 (F:M03, 1)	※印は、花き類・観葉植物としての登録。 * [ダゾメット粉粒剤] バスアミド微粒剤、ガスタード微粒剤
<b>褐色斑点病</b> 植付前 生育全期	[耕種的防除法] 1 菌核が付着している球根は処分する。 2 通気を良くする。 3 発病株は見つけ次第抜き取り処分する。  [薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 ダコニール1000 (F:M05) フロンサイド水和剤 (F:29)	
<b>灰色かび病</b> 生育全期	[薬剤による防除法] 1 フロンサイド水和剤 (F:29) を散布する。	○ 花き共通「灰色かび病」の項参照。
<b>青かび病</b> 掘取後	[薬剤による防除法] 1 球根をオーソサイド水和剤80 (F:M04) に浸漬する。	○ 球根を掘り取り、初期乾燥後に処理し、その後よく乾燥してから貯蔵する。
<b>モザイク病</b> 生育全期	[耕種的防除法] 1 健全な親株から分球する。 2 罹病株は見つけ次第抜き取り処分する。  [薬剤による防除法] 1 アブラムシ類を防除する。	
<b>アブラムシ類</b> 発生初期	[薬剤による防除法] 1 ※マラソン乳剤 (I:1B) を散布する。	○ アブラムシ類はモザイク病を媒介する。 ※印は、花き類・観葉植物としての登録。

(2) 掲載農薬一覧（チューリップ）

農薬名	F R A C コ ー ド	I R A C コ ー ド	有効成分	適用病害虫名				
				球 根 腐 敗 病	褐 色 斑 点 病	灰 色 か び 病	青 か び 病	ア ブ ラ ム シ 類
ダゾメット粉粒剤*		8F	ダゾメット	※				
トップジンM水和剤	1		チオファネートメチル	○				
ホーマイ水和剤	M03		チウラム	○				
	1		チオファネートメチル					
トリフミン水和剤	3		トリフルミゾール	○				
ダコニール1000	M05		T P N		○			
フロンサイド水和剤	29		フルアジナム		○	○		
オーソサイド水和剤80	M04		キャプタン				○	
マラソン乳剤		1B	マラソン					※

\*ダゾメット粉粒剤：バスアミド微粒剤、ガスタード微粒剤

※印は、花き類・観葉植物としての登録。

## 15 シクラメン

## (1) 防除方法

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項
萎凋病 は種前 生育全期 生育全期	[耕種的防除法] 1 土壌消毒を行う。 2 発病株は見つけ次第抜き取り処分する。 [薬剤による防除法] 1 ベンレート水和剤 (F:1) を発病前から15~20日おきにかん注する。かん注量は鉢の大きさにより適宜増減する。	○ 土壌が過湿にならないように管理する。  ○ かん注は発病前から予防的に行う。
軟腐病 生育全期 鉢上げ前 生育全期	[耕種的防除法] 1 発病株は見つけ次第抜き取り処分する。 [薬剤による防除法] 1 土壌及び資材を消毒する。 2 次の薬剤を茎葉部だけでなく、球根部に対しても十分かかるように散布する。 ドーマイシン水和剤 (F:25, M01)	
灰色かび病 生育全期	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 ※ポリベリン水和剤 (F:M07, 19) ※フルピカフロアブル (F:9) ※サンヨール (F:M01)	○ 花き共通「灰色かび病」の項参照。 ○ 保温開始頃から多発する。  ※印は、花き類・観葉植物としての登録。
斑葉病 生育全期	[耕種的防除法] 1 発病葉は摘み取り処分する。	
炭疽病 生育全期	[耕種的防除法] 1 発病葉は摘み取り処分する。 2 かん水の時には葉を濡らさない。 [薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 キノンドーフロアブル (F:M01) ジマンダイセン水和剤 (F:M03, I:UN) #ヘルシード乳剤 (F:3)	○ 炭疽病の防除を行う場合、斑点病の防除は必要ない。  # シクラメン（施設栽培）での登録
斑点病 生育全期	[耕種的防除法] 1 発病葉は摘み取り処分する。	
モザイク病 移植前 生育全期	[薬剤による防除法] 1 アブラムシを早期に防除する。	
アザミウマ類	[耕種的防除法] 1 アザミウマが寄生していない健全な苗を用いる。 2 施設開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入を抑制する。 3 ハウス開口部周辺の発生状況をよく観察し、早期発見に努める。 4 ハウス内に青色粘着版を設置し、発生状況を把握する。	
ミカンキイロ アザミウマ 発生初期	[薬剤による防除法] 1 次の薬剤のいずれかを散布する。 バダンSG水溶剤 (I:14) エビセクト水和剤 (I:14)	

## (2) 掲載農薬一覧 (シクラメン)

農薬名	F R A C コード	I R A C コード	有効成分	適用病害虫名					
				萎凋病	灰色かび病	軟腐病	炭疽病	ミカンキイロアザミウマ	オンシツコナジラミ
ベンレート水和剤	1		ベノミル	○					
ポリベリン水和剤	M07		イミノクタジン酢酸塩		※				
	19		ポリオキシシン複合体						
フルピカフロアブル	9		メパニピリム		※				
サンヨール	M01		D B E D C		※				
ドーマイシン水和剤	25		ストレプトマイシン硫酸塩			○			
	M01		有機銅						
キノンドーフロアブル	M01		有機銅				○		
ジマンダイセン水和剤	M03	UN	マンゼブ				○		
ヘルシード乳剤	3		ペフラゾエート				○#		
パダンスG水溶剤		14	カルタップ					○	
エビセクト水和剤		14	チオシクラム					○	

※印は、花き類・観葉植物としての登録。

#シクラメン（施設栽培）での登録。

16 プリムラ

(1) 防除方法

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項
軟腐病		○ 高温・多湿で発生しやすい。
灰色かび病 発病初期	[薬剤による防除法] 1 ※ポリベリン水和剤 (F:M07, 19) を散布する。	○ 花き共通「灰色かび病」の項参照。 ※印は、花き類・観葉植物としての登録。
斑葉細菌病 生育全期	[耕種的防除法] 1 発病葉は見つけ次第摘み取り処分する。	
アブラムシ類 発生前	[耕種的防除法] 1 育苗期間中は寒冷紗などで被覆する。	

(2) 掲載農薬一覧 (プリムラ)

農薬名	F R A C コ ー ド	I R A C コ ー ド	有効成分	適用病害虫名	
				灰 色 か び 病	オ ン シ ツ コ ナ ジ ラ ミ
ポリベリン水和剤	M07		イミノクタジン酢酸塩	※	
	19		ポリオキシシン複合体		

※印は、花き類・観葉植物としての登録。

17 さくら（切り枝用）

(1) 防除方法

病害虫名及び防除時期	防除方法	参考及び注意事項
傷口のゆ合促進 剪定時及び病患部 削り取り直後	[薬剤による防除法] 1 バッチレート（F:M01）を原液塗布する。	○ 使用直前によく攪拌し、原液をそのままハケ等で塗布する。使用後のハケは、水でよく洗う。
コスカシバ	[耕種的防除法] 1 生育期に枝幹部や地際部からヤニや虫糞が出ている場合は、コスカシバの食入であることが多いので見つけ次第刺殺する。	
ケムシ類	[薬剤による防除法] 1 フェニックスフロアブル（I:28）を散布する。	
カイガラムシ類	[薬剤による防除法] 1 ※アプロードフロアブル（I:16）を散布する。	※アプロードフロアブルは樹木類として登録。

(2) 掲載農薬一覧（さくら（切り枝用））

農薬名	F R A C コ ー ド	I R A C コ ー ド	有効成分	適用害虫名		
				傷口のゆ合促進	ケムシ類	カイガラムシ類幼虫
バッチレート	M01		有機銅	○		
フェニックスフロアブル		28	フルベンジアミド		○	
アプロードフロアブル		16	ブプロフェジン			○ 樹

樹：樹木類としての登録